

# 大年古墳群ほか

農道美勝線建設  
に伴う発掘調査

1995

岡山県教育委員会



1. 大年古墳群全景（西方上空より）



2. 1号墳出土須恵器装飾付壺小像

3. 2号墳主体部出土玉類

## 序

本報告書には、英田郡美作町上相に所在する大年古墳群の発掘調査結果を収載しました。

現在、岡山県東北部の勝田郡勝央町において、おかやまファーマーズ・マーケットの建設計画が進行していますが、その周辺道路整備の一貫として、美作町と勝央町を結ぶふるさと農道美勝線の建設が策定されています。この道路は、おかやまファーマーズ・マーケットへの進入道としての機能を果たすため、地元である美作町はもとより直接建設を担う勝英地方振興局においても、用地買収から始まる諸条件の整備を急いでいるところであります。

岡山県遺跡台帳によれば、用地内には3基の古墳が載せられており、岡山県教育委員会では、遺跡の取扱について関係機関と協議を重ねてまいりましたが、やむなく記録保存の処置を講ずることとなりました。

古墳の遺存状態は必ずしもよくありませんでしたが、調査の結果、いずれも古墳時代後期の古墳であることが判明しました。特に1号墳は小規模な前方後円墳であることが確認され、注目すべき遺物も出土するなどの成果が得られました。古墳時代後期における前方後円墳の数少ない調査例として、重要な意味をもつものと思われます。また古墳の周囲には、近世の建物や井戸、墓といった遺構も検出されました。

これらの成果を収めたこの報告書が、文化財の保護、保存のために活用され、また、地域の歴史を研究する資料として役立つならばこれに過ぎる喜びはありません。

最後に発掘調査ならびに報告書の作成にあたって、岡山県文化財保護審議会委員の方々をはじめ、美作町教育委員会ならびに関係各位から賜りました多大な御指導と御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

岡山県教育委員会

教育長 森 崎 岩之助

## 例　　言

1. 本報告書は、農道美勝線建設工事に伴い、岡山県企画部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが平成6年度に発掘調査を実施した、大年古墳群ほかの発掘調査報告書である。
2. 大年古墳群は、英田郡美作町上相1487-1ほかに所在する。
3. 発掘調査は、尾上元規・杉山一雄が担当して平成6年4月11日～7月14日の期間に行なった。
4. 発掘調査にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の近藤義郎・水内昌康の両氏から御指導・御助言をいただいた。
5. 報告書の編集・作成および遺物整理は、尾上・杉山が岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において行なった。
6. 本文の執筆は、正岡睦夫・尾上元規・杉山一雄が分担して行ない、第2章第1節を正岡が、第3章第4節と第4章を杉山が、その他を尾上が執筆した。
7. 本書に使用したレベルの数値は海拔高であり、方位は磁北である。
8. 本書第2図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図「真加部」を複製し加筆したものである。
9. 出土遺物ならびに図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて保管している。

## 目 次

第1章 地理的・歴史的環境	1	第2節 大年2号墳	18
第2章 発掘調査の経緯と経過	3	第3節 大年4号墳	26
第1節 調査にいたる経緯	3	第4節 古墳に伴わない遺構と遺物	28
第2節 発掘調査の経過	3	第4章 確認調査の概要	37
第3章 大年古墳群の調査	5	第5章 まとめ	40
第1節 大年1号墳	7		

## 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1	第23図 2号墳周堀出土埴輪片	25
第2図 周辺の遺跡分布図	2	第24図 4号墳周堀測量図	27
第3図 大年古墳群地形測量図	5	第25図 4号墳周堀断面図	27
第4図 大年古墳群遺構配置図	6	第26図 4号墳周堀及び周辺出土須恵器	27
第5図 1号墳墳丘測量図	5	第27図 古道周辺出土陶棺片	27
第6図 1号墳墳丘断面図①	9	第28図 古墳に伴わない遺構配置図	29
第7図 1号墳墳丘断面図②	10	第29図 土壙1・2	30
第8図 1号墳周堀内遺物出土状況	11	第30図 土壙墓1	30
第9図 1号墳周堀内須恵器甕集中部	11	第31図 建物1	31
第10図 1号墳出土須恵器①	13	第32図 建物2及び周辺の柱穴	32
第11図 1号墳出土須恵器②	14	第33図 遺構に伴う近世の遺物	32
第12図 1号墳出土須恵器③	15	第34図 井戸1～5及び近接する柱穴	33
第13図 1号墳出土須恵器④	16	第35図 井戸6及び近接する柱穴	33
第14図 1号墳出土土師器	16	第36図 土壙墓2	34
第15図 2号墳墳丘測量図	18	第37図 土壙墓2出土遺物	34
第16図 2号墳墳丘断面図	19	第38図 土壙3及び近接する柱穴	35
第17図 2号墳主体部	20	第39図 焼土壙	35
第18図 2号墳主体部遺物出土状況	21	第40図 遺構に伴わない遺物	36
第19図 2号墳主体部内出土須恵器	21	第41図 確認調査トレンチ配置図	37
第20図 2号墳主体部内出土鉄器	22	第42図 確認調査トレンチT1～T3	38
第21図 2号墳主体部内出土玉類	23	第43図 確認調査トレンチT4・T5	39
第22図 2号墳墳丘及び周堀出土須恵器	25		

## 図版目次

### 巻頭カラー図版

1 大年古墳群全景	6 井戸 1～5
2 1号墳出土須恵器装飾付壺小像	7 井戸 6
3 2号墳主体部出土玉類	8 土墳墓 2
図版 1－1 大年古墳群遠景	図版 5－1 土墳 3
2 大年古墳群調査前の状況	2 焼土墳
3 1号墳全景	3 1号墳出土遺物(1)
図版 2－1 1号墳盛土状況	図版 6－1 1号墳出土遺物(2)
2 1号墳周堀内須恵器甕出土状況	2 2号墳出土遺物(1)
3 2号墳全景	図版 7－1 2号墳出土遺物(2)
図版 3－1 2号墳主体部と遺物出土状況	2 4号墳出土土器
2 2号墳主体部玉類・刀子出土状況	3 古道周辺出土陶棺
3 2号墳主体部鉄鏃出土状況	図版 8－1 1号墳出土炉壁
4 4号墳周堀	2 1号墳出土鉄滓
図版 4－1 土墳 1	3 2号墳出土炉壁・鉄滓
2 土墳 2	4 4号墳出土炉壁・鉄滓
3 土墳墓 1	5 遺構に伴う近世の遺物
4 建物 1	6 土墳墓 2 出土遺物
5 建物 2	7 遺構に伴わない遺物

## 表 目 次

第1表 1号墳出土鉄滓・炉壁観察表	16	第6表 2号墳出土鉄滓・炉壁観察表	26
第2表 1号墳出土須恵器観察表	17	第7表 4号墳出土須恵器観察表	28
第3表 2号墳主体部出土鉄鏃観察表	22	第8表 4号墳出土鉄滓・炉壁観察表	28
第4表 2号墳主体部出土玉類観察表	24	第9表 土墳墓 2 出土鉄器観察表	34
第5表 2号墳出土須恵器観察表	26		

# 第1章 地理的・歴史的環境

大年古墳群は、岡山県の北東部、英田郡美作町大字上相に所在する。

吉井川の支流である吉野川をさかのぼると、東方に梶並川、西方に滝川と分岐するが、それぞれその流域に、豊国原、勝間田の盆地を形成している。美作町上相地区は、その二つの川及び盆地にはさまれた位置にあり、標高261mの間山<sup>はしたやま</sup>南麓の谷部にあたる。大年古墳群は、この谷部に北西から張り出した低丘陵上のほぼ先端部に立地し、上相の谷を眼前に臨んでいる。

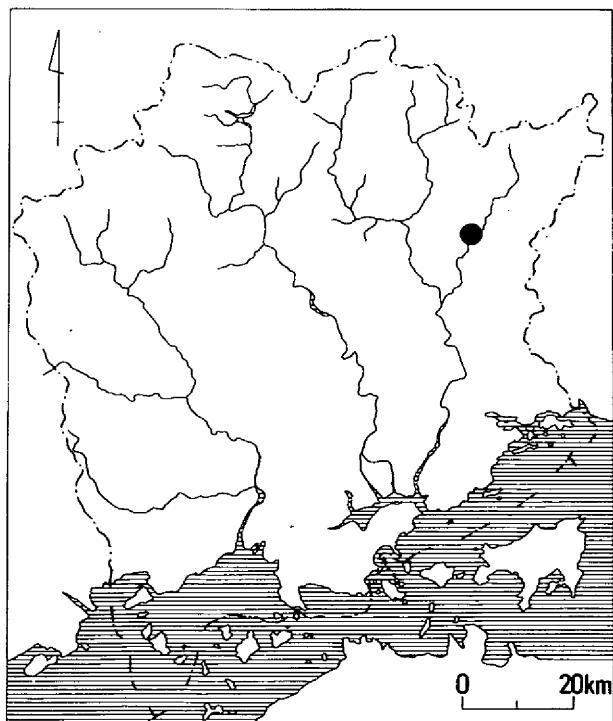
本古墳群の周辺において、人々の生活の痕跡がうかがえるようになるのは、弥生時代になってからである。前期の遺跡は知られていないが、本古墳群の西方約1.1kmの勝央町小中遺跡<sup>(1)</sup>では、弥生時代中期から後期にかけての比較的大規模な集落が形成されている。

古墳時代に入ると、多数の古墳が築かれるようになる。前期古墳では、勝間田地域の岡高塚古墳<sup>(2)</sup>、殿塚古墳<sup>(3)</sup>、よつみ峠古墳<sup>(4)</sup>、琴平山古墳<sup>(5)</sup>といった前方後円（方）墳がある。上相地区においては、上相中塚古墳<sup>(6)</sup>、上相東塚古墳<sup>(7)</sup>、鍛冶屋塚古墳<sup>(8)</sup>といった前方後円墳があり、出土遺物の乏しさから、時期を決定することが困難であるが、おそらく古墳時代後期の築造と思われる。

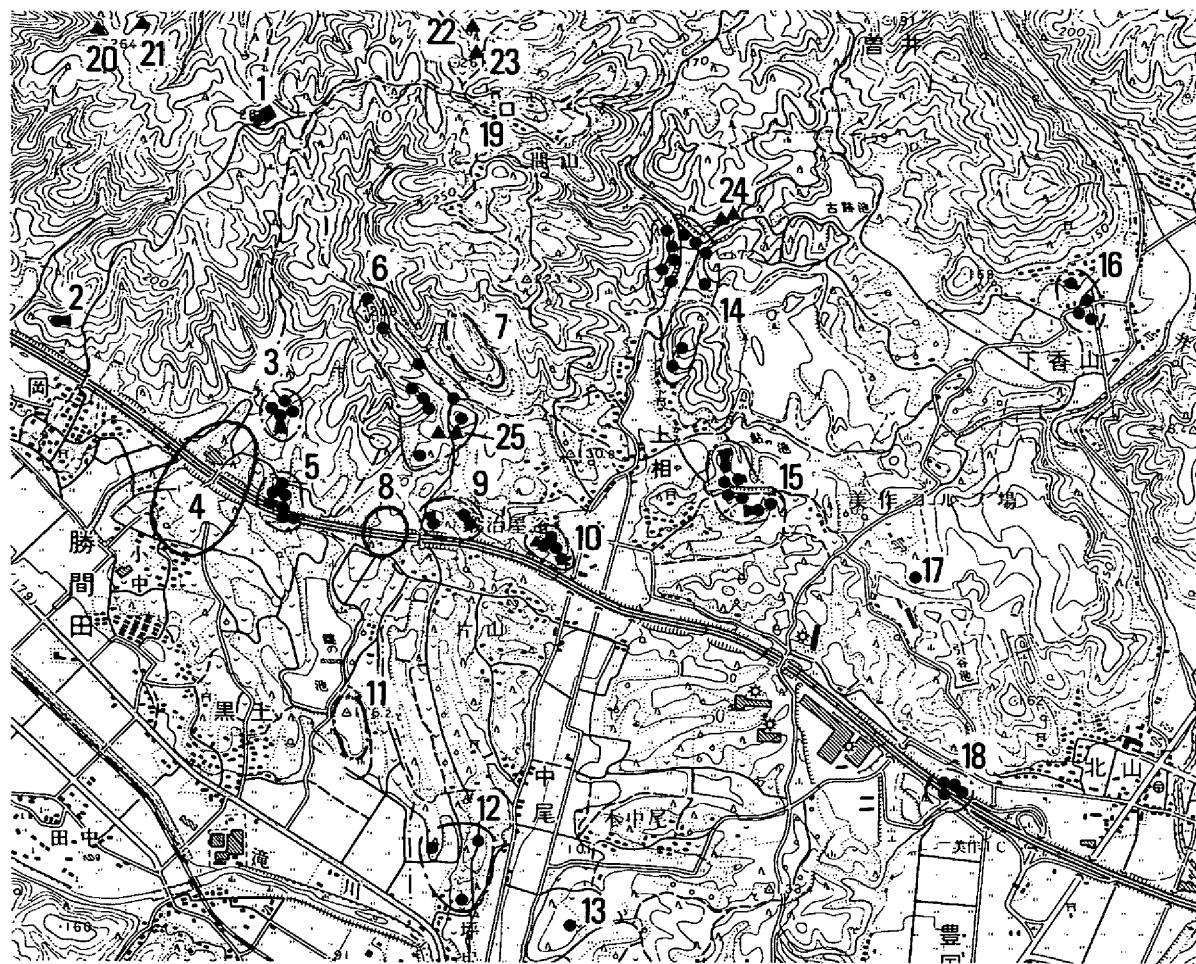
古墳時代後期になると、群集して築かれた小規模な円墳群が形成されるが、この地域では木棺直葬を内部主体とするものが目立つ。勝間田地域では小中古墳群<sup>(9)</sup>があり、上相地域では今回調査した大年古墳群がある。また大年古墳群の東方約1.5kmの北山古墳群<sup>(10)</sup>も木棺直葬墳である。これらの木棺直葬墳は、盆地や谷を臨む低丘陵上の、比較的見晴らしの良い場所に立地している。時期的には、6世紀前半から中葉頃のものが多い。これらに対して、上相地区の岩井谷古墳群や金尾古墳群は、やや奥まった谷部の斜面に立地し、決して見晴らしの良い場所ではない。これらは、横穴式石室をもつものが多いことや、陶棺の出土が伝えられることなどから、先の木棺直葬墳よりは新しい6世紀後半から7世紀代を中心とする古墳群であると考えられる。

一方、古墳時代の集落址としては、本古墳群に近い上相遺跡<sup>(11)</sup>がある。6世紀代の堅穴住居から鐵滓が多数出土しているのが特徴的である。美作国は古代から鐵の産地で、朝廷に鐵を貢納した国として知られているが、そのような盛んな鐵生産が古墳時代後期にまでさかのぼることを示すものといえる。上相地区の地名においても、鍛冶屋塚、金屎など<sup>かなくそ</sup>が認められ、鐵滓の散布している場所も多い。

中世には、勝間田焼と呼ばれる須恵質土器の生産地の中心となる。その窯跡は勝間田盆地周辺に散在しているが、間山もその中心地



第1図 遺跡位置図



1. 岡高塚古墳
2. 殿塚古墳
3. よつみ峠古墳群
4. 小中遺跡
5. 小中古墳群
6. 岩井谷古墳群
7. よぼしや古墳群
8. 上相遺跡
9. 鍛冶屋造古墳群
10. 大年古墳群
11. 丸山古墳群
12. 坪尻古墳群
13. 当福古墳
14. 金尾古墳群
15. 中塚古墳群(鈎の池南古墳群)
16. 下香山古墳群
17. 古墳
18. 北山古墳群
19. 間山瓦経塚
20. 大平山窯跡
21. 河内奥窯跡
22. カマガ谷窯跡
23. 女夫岩窯跡
- 24・25. 窯跡

第2図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

のひとつである。間山山頂付近などに窯跡が確認されている。

#### 註

- (1) 高畠知功・栗野克己ほか「小中古墳群・小中遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』4 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7 1975年
- (2) 今井堯「美作の前方後方墳四題」『古代吉備』第9集 1987年
- (3) 安川豊史「殿塚古墳」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編 1991年
- (4) 安川豊史「よつみ峠古墳」同上
- (5) 安川豊史「琴平山古墳」同上
- (6) 安川豊史「上相中塚古墳」同上
- (7) 安川豊史「上相東塚古墳」同上
- (8) 今井堯「原始・古代社会」『美作町史編纂中間報告書』1964年
- (9) 註1に同じ
- (10) 松本和男・二宮治夫「北山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4 1973年
- (11) 松本和男「上相遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』1 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3 1973年

## 第2章 発掘調査の経緯と経過

### 第1節 発掘調査にいたる経緯

美作町の町道北山上相線から勝央町に建設されるファーマーズ・マーケットを結ぶ幹線道路を整備するため、岡山県において、ふるさと農道緊急整備事業が実施されることになった。全長1,200m、幅員7mの道路で、中国縦貫自動車道の北側の丘陵部を通る計画である。

平成5年6月、美作町教育委員会から大年古墳群が予定地にかかるのではないかという連絡が文化課にあり、ただちに文化課で現地調査を行なった。その結果、路線予定地内において、かなり破損したものであるが、3基の古墳が確認され、集落遺跡も推定された。現地調査の結果について、県農林部耕地課へ説明し、路線の変更を申し入れた。

平成5年7月、関係機関との協議において、北側に民家があり、南側に墓地があって、路線変更が困難ということになり、やむをえず、発掘調査を実施することとした。

平成6年3月、美作町において、岡山県勝英地方振興局、美作町教育委員会、岡山県教育委員会文化課、岡山県古代吉備文化財センターで発掘調査について協議を行ない、平成6年4月から6月に実施することとした。古墳の調査中に、中・近世の遺跡が発掘されたことから調査期間を同年7月まで延長した。

なお、鍛冶屋造古墳群の一部が路線内に入っていることが判明し、協議の結果、設計を変更し、施工範囲から除く処置を行った。

#### 調査体制

##### 岡山県古代吉備文化財センター

所長	河本 清
次長	葛原 克人
総務課長	丸尾 洋幸
総務課長補佐 (総務係長)	杉田 卓美

調査第一課長	正岡 隆夫
調査第一課長補佐	松本 和男
(第一課第一係長)	
主事	尾上 元規 (調査担当)
主事	杉山 一雄 (調査担当)

##### 発掘作業員

可児 篤 小林禮二郎 杉山憲吾 杉山志郎 水島秀志 水島義春 杉山悦子 杉山弘子  
中村和子 水島富枝

### 第2節 発掘調査の経過

当初、大年古墳群は1・2・3号墳の3基を調査する予定であったが、3号墳は用地買収が進んでいないため後回しにして、1・2号墳から調査を開始した。結局3号墳の調査はまだ実施できておらず、あらためて別の期間に調査を行なうこととなった。

1・2号墳は、墳丘盛土の残存状況は良くなかったが、1・2号墳ともに墳丘の周囲を掘り下げ基

## 第2章 発掘調査の経緯と経過

盤層まで達した段階で周堀が検出された。それによって墳形と規模が復元でき、特に1号墳は前方後円墳と認識された。主体部については、2号墳のみ検出された。

1・2号墳の北側に東西に通っている古道についても、当初から調査対象としていたが、1か所トレンチ調査を行なった結果、非常に残りが悪く特に注意すべきものは見られなかった（第16図参照）。

調査の進行に伴い、古墳の周囲から近世を中心とする遺構群が検出された。また1・2号墳から古道をはさんで北側の部分の調査で、古墳の周堀が検出され、もう1基古墳が存在することが判明した。これを大年4号墳として、周堀のごく一部のみであるが、調査した。これらの予想されなかった遺構の調査に時間を取られたため、予定調査期間を約2週間延長し、7月中旬に調査を終了した。

美勝線用地内の確認調査については、5月末から約2週間をかけて、古墳の調査と並行しながら行なった。重機によって掘り下げを行なったが、遺構・遺物ともに認められなかつたため、図面と写真をとって埋め戻し、調査を終了した。

なお、前方後円墳の発見といった重要な成果が得られたため、6月25日土曜日の午後、現地説明会を開催し、地元美作町町民の方々を中心として、約200名もの参加者を得た。現地説明会に際しては、事前の準備を含め、美作町教育委員会から多大な協力をいただき、たいへんお世話になった。記して感謝の意を表する。

### 日誌抄

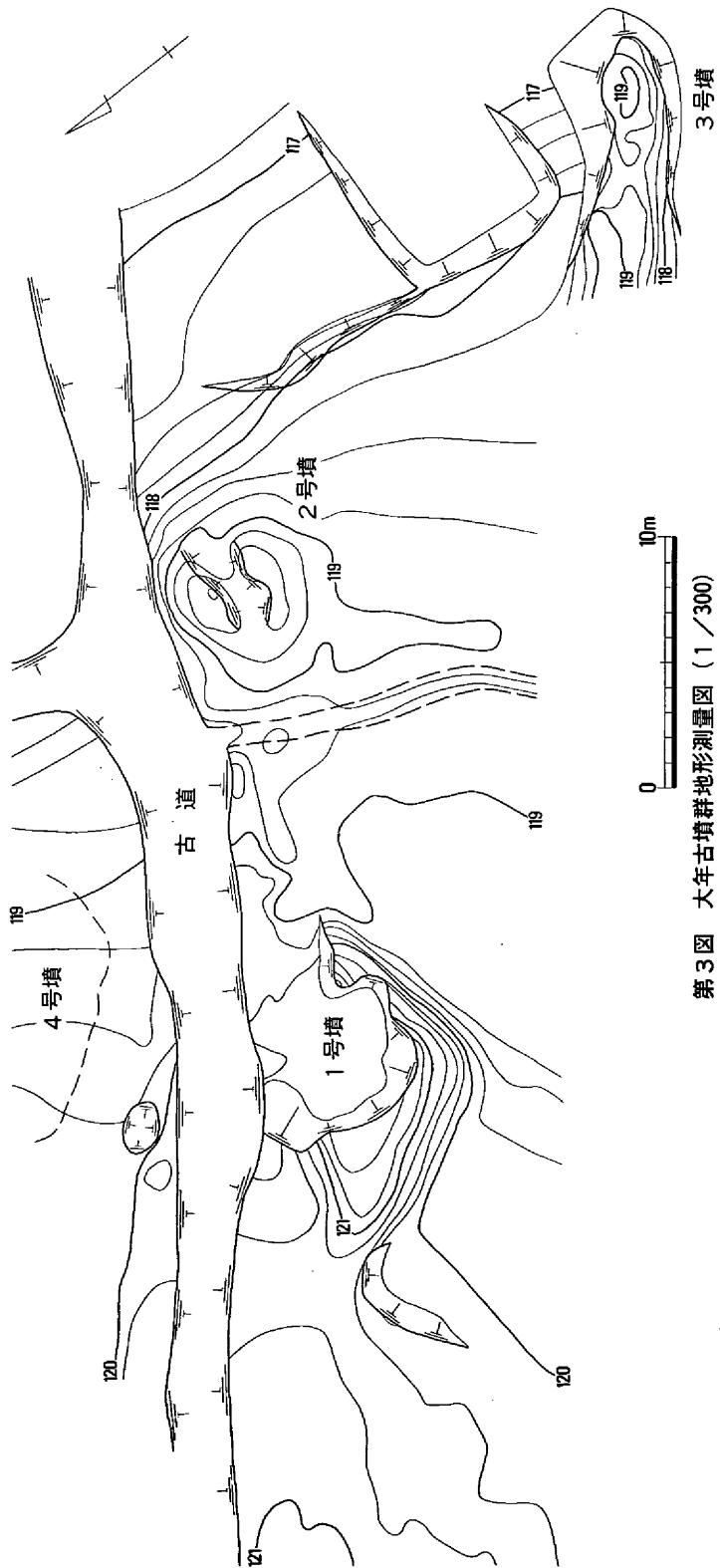
4月11日（月）	調査開始	6月10日（金）	近世墓及び井戸の検出
4月13日（水）	1・2号墳調査開始	6月13日（月）	確認調査終了
5月13日（金）	2号墳主体部検出	6月25日（土）	現地説明会開催
5月25日（水）	1号墳を前方後円墳と確認	6月29日（水）	4号墳の周堀を確認
5月27日（金）	確認調査開始	7月6日（水）	掘り下げ作業終了
6月1日（水）	1号墳周辺の近世遺構検出	7月14日（木）	調査終了
6月6日（月）	中世土壙墓検出		

なお、調査及び報告書作成期間中、下記の方々より遺構・遺物について貴重な御助言をいただいた。記して感謝の意を表する（敬称略、五十音順）。

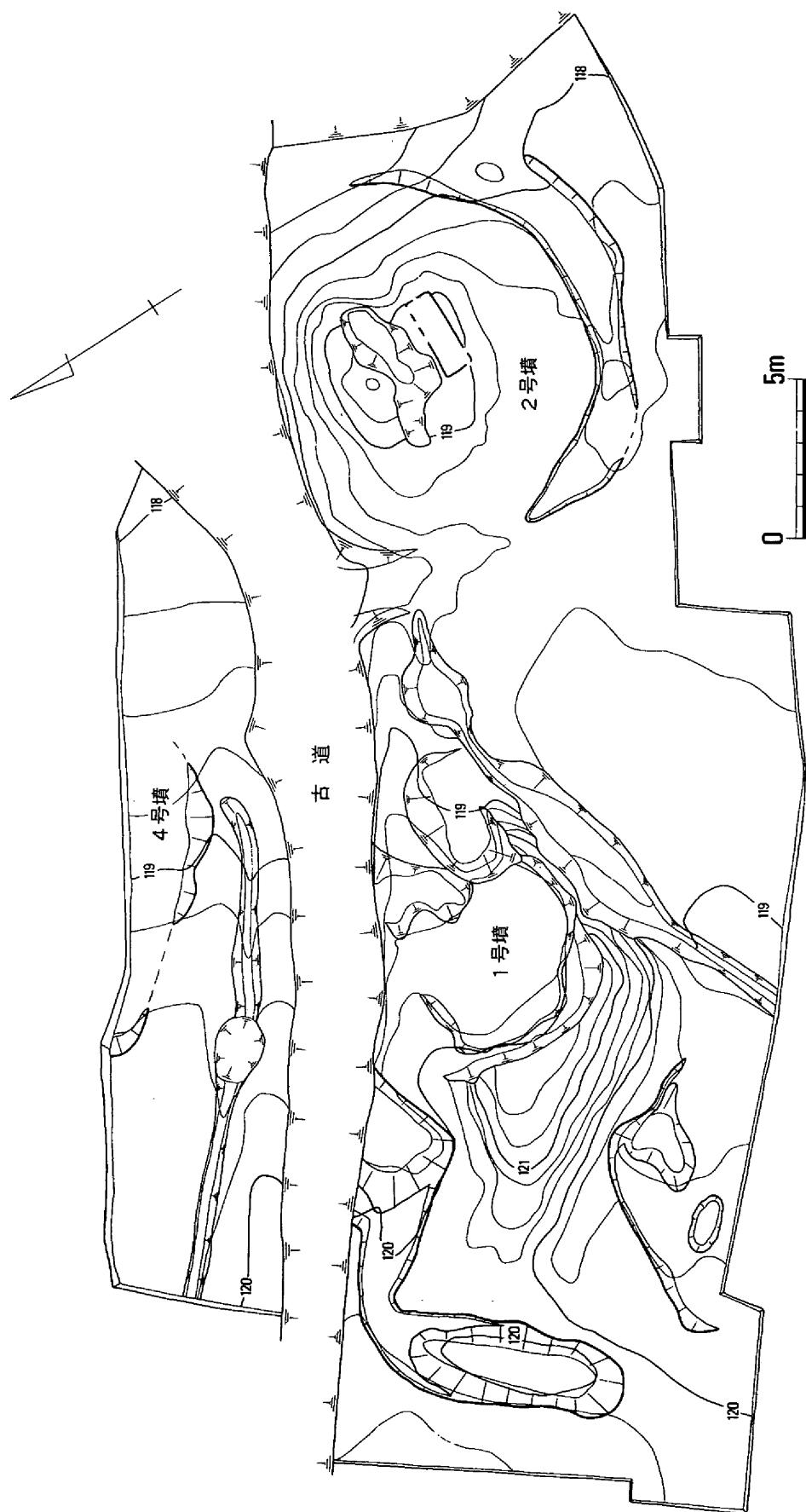
亀田修一 坂本心平 佐藤良子 乗岡 実 平岡正宏 安川豊史 行田裕美

## 第3章 大年古墳群の調査

大年古墳群は、従来、1・2・3号墳が3基の円墳として知られていた。調査前の状況としてはいずれも残存状況が悪く、あまり成果は期待できなかった。1号墳は、墳丘は2m前後の高さで残存していたが、中央部を大きくえぐられており、また北東側は道によって削られていた。南側についても、以前耕作地となっていたようで、墳丘まで削り込むようにして広い平坦地がつくられていた。2号墳は、3基の中では比較的残存状況が良いように思われた。墳丘の高さはわずかしか残っておらず、北側を道によって削られていたが、全体としては比較的整った円形の高まりを示していた。3号墳は今回調査を行なっていないが、3基の中で最も破壊が著しく、北・東・南の三方向に墓地が造成され、三方から大きく削り込まれている。古墳の中心部はすでに消失てしまっているものと思われ、主体部が残存している可能性は低い。大年古墳群の調査に入る前、この3号墳の周辺で鉄釘の破片を表採している。錆割れと風化が著しく、図示していないが、断面が $1.2\text{cm} \times 0.7\text{cm}$ 程度のやや扁平な長方形を呈するもので、6世紀後半頃の年代が与えられよう。3号墳の築造年代を考える手がかりになると思われる。4号墳は調査中に新たに発見された古墳であり、1号墳の北東、道をはさんだ反対側に位置する。調査前は単なる



第3図 大年古墳群地形測量図 (1 / 300)



第4図 大年古墳群構造配置図 (1/200)

平坦地であり、古墳の存在は全く予想されなかった。

今回調査を行なったのは1・2・4号墳の3基であり、またそれ以外にも調査区内から古墳に伴わない遺構・遺物が発見された。以下、その成果についてまとめることにする。

## 第1節 大年1号墳

### 1 墳丘と周堀

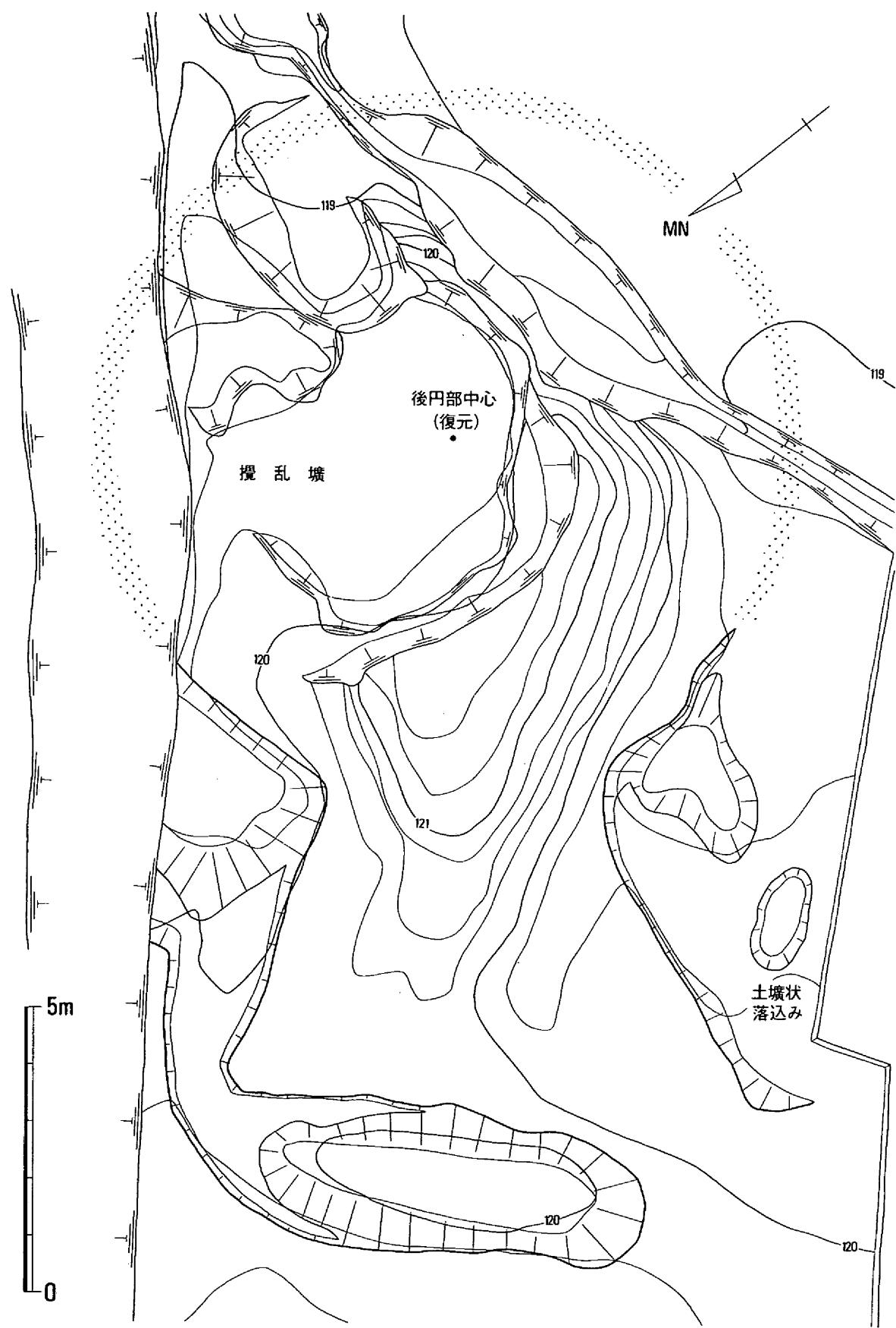
1号墳は、今回の調査で、前方部を北西に向けた小形の前方後円墳であることが明らかとなった。墳丘の残存状況は非常に悪く、前方部は削平され、後円部も周囲から削り込まれている状況である。また後円部の中心も、盗掘あるいは土取りによってえぐられている。このような残存状況の中で、前方部側において古墳の周堀が検出され、その形態から前方後円墳であることが確認できた。周堀を確認できたのは前方部からくびれ部にかけての部分のみであり、後円部の大部分では削平されて残っていない。前方部からくびれ部にかけての周堀の形態から、1号墳の墳丘を復元すれば、全長18.5m、後円部径12.5m、前方部長6.5m、前方部前端幅9.1m、くびれ部幅4.9mとなる。また現存する墳丘の高さは約2m、墳丘主軸の方位はN128°Eである。

周堀の深さは一定しておらず、場所によってかなり異なる。両くびれ部と、前方部前面の中心部分は特に深く掘り込まれており、検出面からの深さは、北東側くびれ部で約50cm、南西側くびれ部で約35cm、前方部前面中心部で約45cmを測る。それ以外の部分では徐々に浅くなっている、前方部の両コーナーで最も浅くなっている。北東側コーナーでは5cm前後の深さになり、南西側コーナーでは周堀が途切れている。南西側コーナーについては、浅いながらもめぐっていた周堀が削平によって消失している可能性もあるが、この古墳にいたる陸橋として本来途切れていた可能性がある。墳丘平面形をみるとこの部分のみコーナーに向かって張り出した形態を示しており、周堀が途切れていることとの関連が考えられる。なお、南西側くびれ部の前方部よりの周堀内に、土壌状の落ち込みが検出されている。埋葬施設の可能性も考えられるが、遺物も出土しておらず性格は不明である。

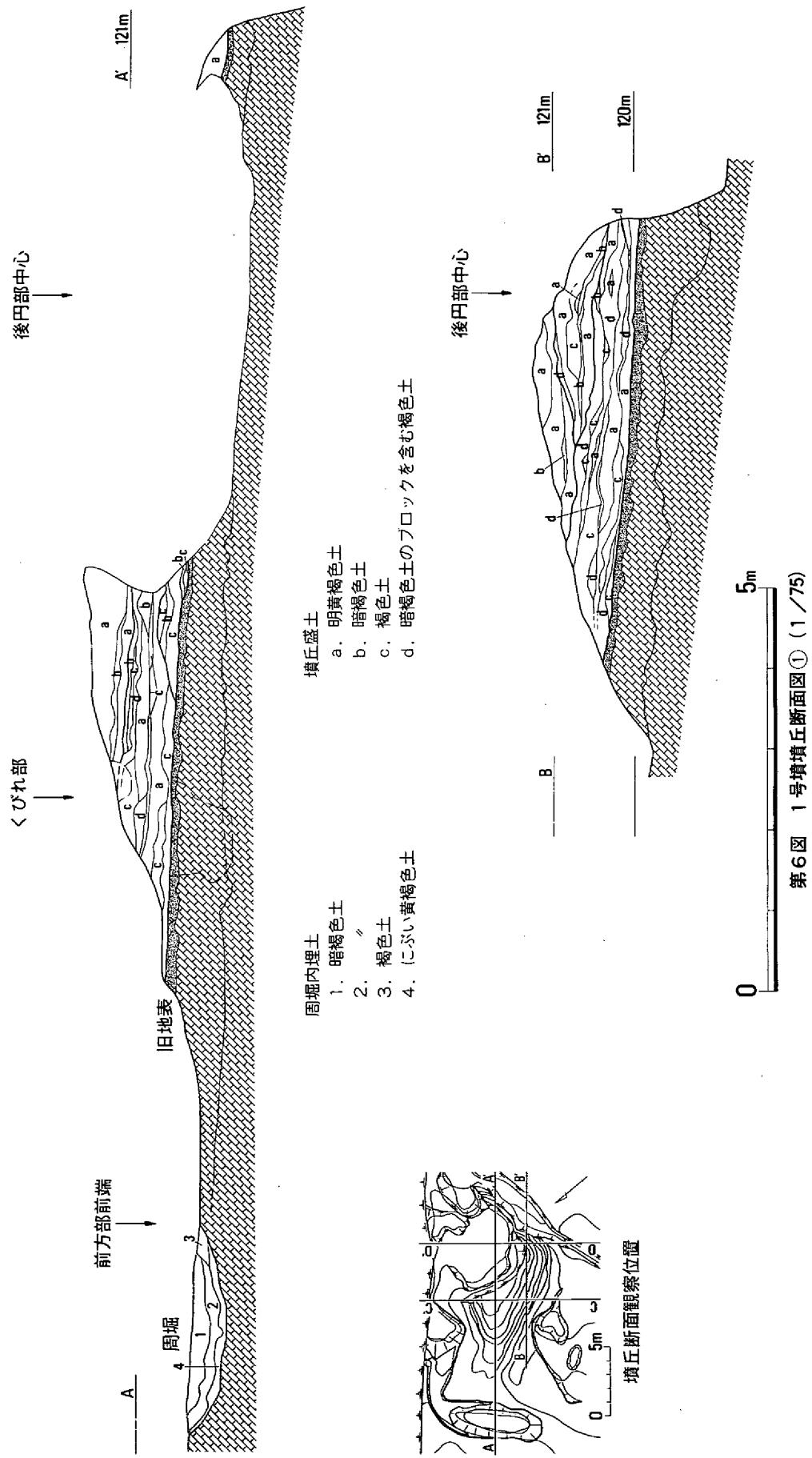
墳丘の盛土の残存状況はあまりよくないが、比較的残りのよい部分で盛土の土層断面を観察した(第6・7図)。全体的には、旧地表層の上に、色調から4種類程度に区別される土を細かな互層をして盛り上げている。盛土の工程としては、まず第1に後円部側のみに約30cmの厚さで盛土を行ない、その後前方部・後円部両方に盛り上げている状況がうかがえる(断面図A-A'参照)。後者の工程では、前方部側のみに盛り上げている土層も見られる。墳丘の上部ではあまり細かな互層は見られなくなり、地山の破碎礫を多く含むような明黄褐色土を厚く一気に盛っているようである。また各工程において、土層が墳丘の周辺部では厚く、中心部へ向かって傾斜している傾向がうかがえる(断面図C-C'等参照)。墳丘周辺部に堤状に積み上げながら、その内部に埋め込んでいくという盛土の方法がとられているものと考えられる。

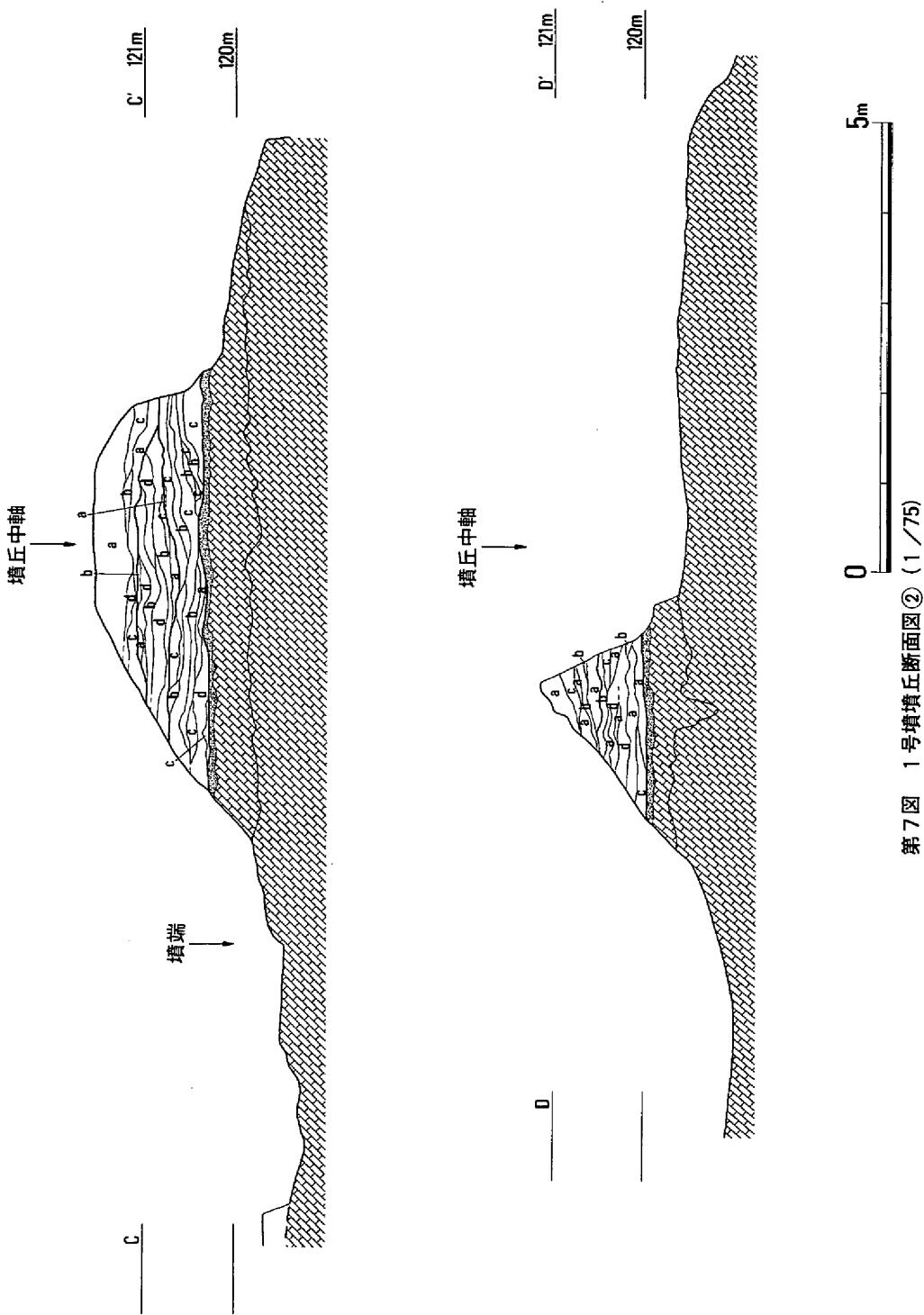
### 2 主体部

上述したように後円部の中心を大きくえぐり取られているため、主体部については全く不明である。この攪乱壙の壁面を観察したが、主体部の痕跡は確認できなかった。1号墳の時期的な位置付けから、可能性としては木棺直葬か、竪穴式あるいは横穴式石室が考えられるが、攪乱壙付近に石室石材と思われるような石材が認められなかったことなどから、木棺直葬の可能性が高い。



第5図 1号墳墳丘測量図 (1/100)

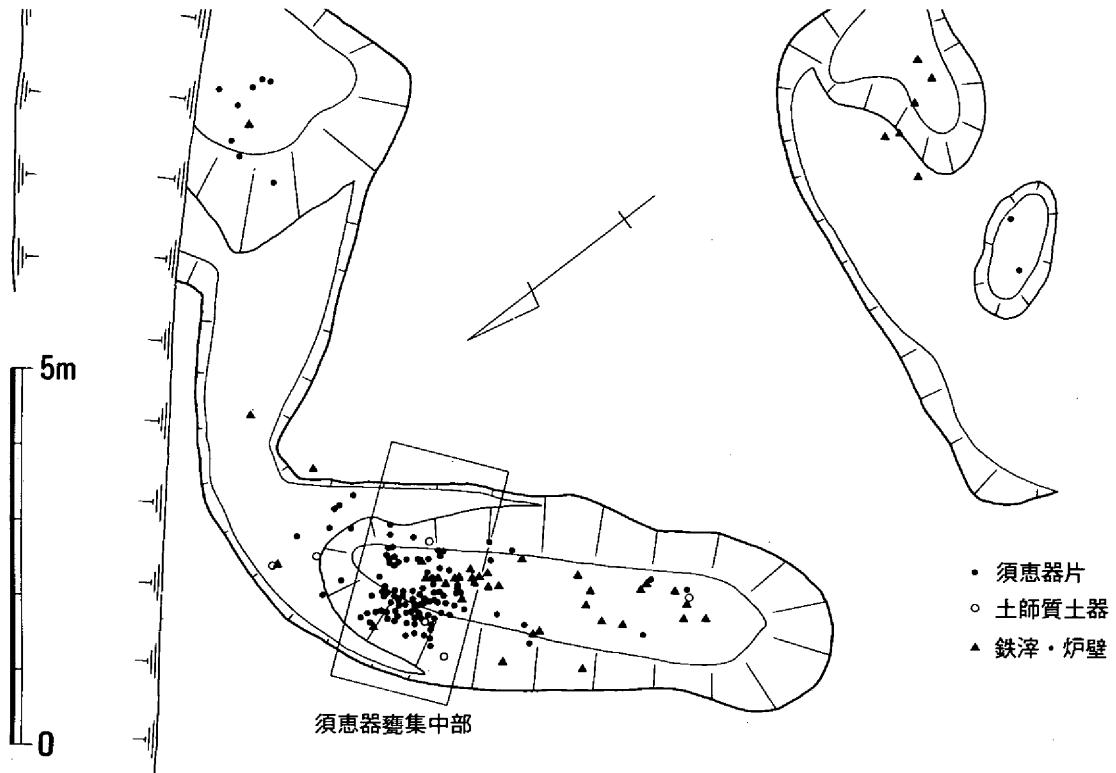




第7図 1号墳墳丘断面図② (1/75)

### 3 遺物出土状況

1号墳において遺物が集中して出土しているのは、後円部中央の攪乱壙周辺と、周堀内である。前者においては、攪乱土の中から須恵器の破片が多数と若干の土師器片が出土している。破壊が著しく、小片になっているものが多い。甕の破片のほかに、壺、高壺などの小形器種が多く、主体部内に副葬されていたものを含んでいると考えられる。装飾付壺の破片も、大部分がこの攪乱壙から出土している。一方周堀内では、前方部前面を中心として多量の遺物が出土している(第8図)。須恵器のほか、60点をこえる鉄滓・炉壁、土師質土器少數がある。前方部前面のやや北東よりの部分では、須恵器のほか、60点をこえる鉄滓・炉壁、土師質土器少數がある。



第8図 1号墳周堀内遺物出土状況 (1/100)



第9図 1号墳周堀内須恵器甕集中部 (1/30)

器の甕1個体分が破片となって出土しており(第9図)、接合作業の結果、ほぼ完形に復元することができた(第12図-31)。周堀の底から20cm以上浮いた位置で出土しているが、底部がきれいに回った状況で、一見、その位置に甕が据えられていたような印象を受けた。しかしながら、その底部のさらに下からも同一個体の甕の破片が出土していることから、完形の甕がその位置に据えられているものとは考えられない。かなり不自然な出土状況であるといわねばならず、甕の人為的な破壊を伴う祭祀行為の可能性がある。またその付近から鉄滓・炉壁も多数出土しているが、この甕とほぼ同じレベルで検出されている。

周堀内において、前方部前面以

### 第3章 大年古墳群の調査

外では、両くびれ部付近に若干の遺物の集中が見られる。北東側くびれ部では、須恵器の蓋（第13図）や装飾付壺の破片、鉄滓などが出土しており、南西側くびれ部では鉄滓が集中している。

#### 4 出土遺物

##### a 須恵器

装飾付壺（第10図） 脚付の広口壺の胴部に、小像や子壺を付けるものである。胴部には大きく張り出した断面三角形の突帯を張りつけ、その上と、さらに上の壺肩部に小像・子壺を張りつけている。小像には人物（4）、猪（1・5）、犬（1）が認められる。人物は、腕と腰以下を欠損しているが、頭部にはみずらが表現されている。また胸の部分には数条の刻線が見られる。猪はたてがみと潰れた鼻、口などが表現されており、胴体には竹管状の刺突文が見られる。犬は頭部に目と耳が表現されている。6は脚部であるが、櫛描波状文と凹線が交互にめぐらされ、円形及び長方形あるいは台形の透孔をもつものである。小像が、胴部突帯の上にのる位置ばかりでなくさらに上の肩部にも付けられている点や、脚部の形態、透孔の形態など、本古墳と同じ美作町に所在する北山1号墳出土のものと非常に類似している。

坏蓋（第11図—7～12） 口縁端部や肩部の特徴から4類に分類できる。1類は口縁端部に内傾するくぼんだ面をもち、肩部の段が不明瞭なもの（9～11）、2類は口縁端部の内面に細い沈線をもち、肩部の段が不明瞭なもの（7）、3類は口縁端部を丸くおさめ、肩部の段も不明瞭なもの（8）、4類は口縁端部をやや尖り気味に丸くおさめ、肩部に明瞭な段を有するもの（12）である。4類は器壁も通常のものより薄く、特殊な印象を受けるが、1類から3類については、順番に、1類がやや古い要素、3類がやや新しい要素をもつものとして捉えられる。

坏身（第11図—13～15） いずれも口縁端部は丸くおさめている。13はやや器壁が薄く、胎土・色調が12の坏蓋と類似していることから、セット関係をなす可能性がある。

その他の小形器種としては、高坏（第11図—16～19）、甌（第11図—20）、横瓶の口縁部の破片（第11図—21・22）、台付壺の脚部（第11図—23）がある。

甌（第11図—24～30、第12図—31） 本古墳出土の甌の特徴として、櫛描波状文を非常に多用することが挙げられ、大部分の個体に櫛描波状文が認められる。また31は口縁部形態など、特徴的な資料である。口縁部がやや内湾しながら開き、ほぼ水平な面をもって終わっている。そして外面には櫛描波状文と凹線が交互にめぐらされている。このような資料は、7世紀代の類例が多いようである。さらに31は、胴部内面の同心円当て具痕の中心が円ではなく5つの稜をもつ星形をなしている。いわゆる車輪文タタキの一種であろう。

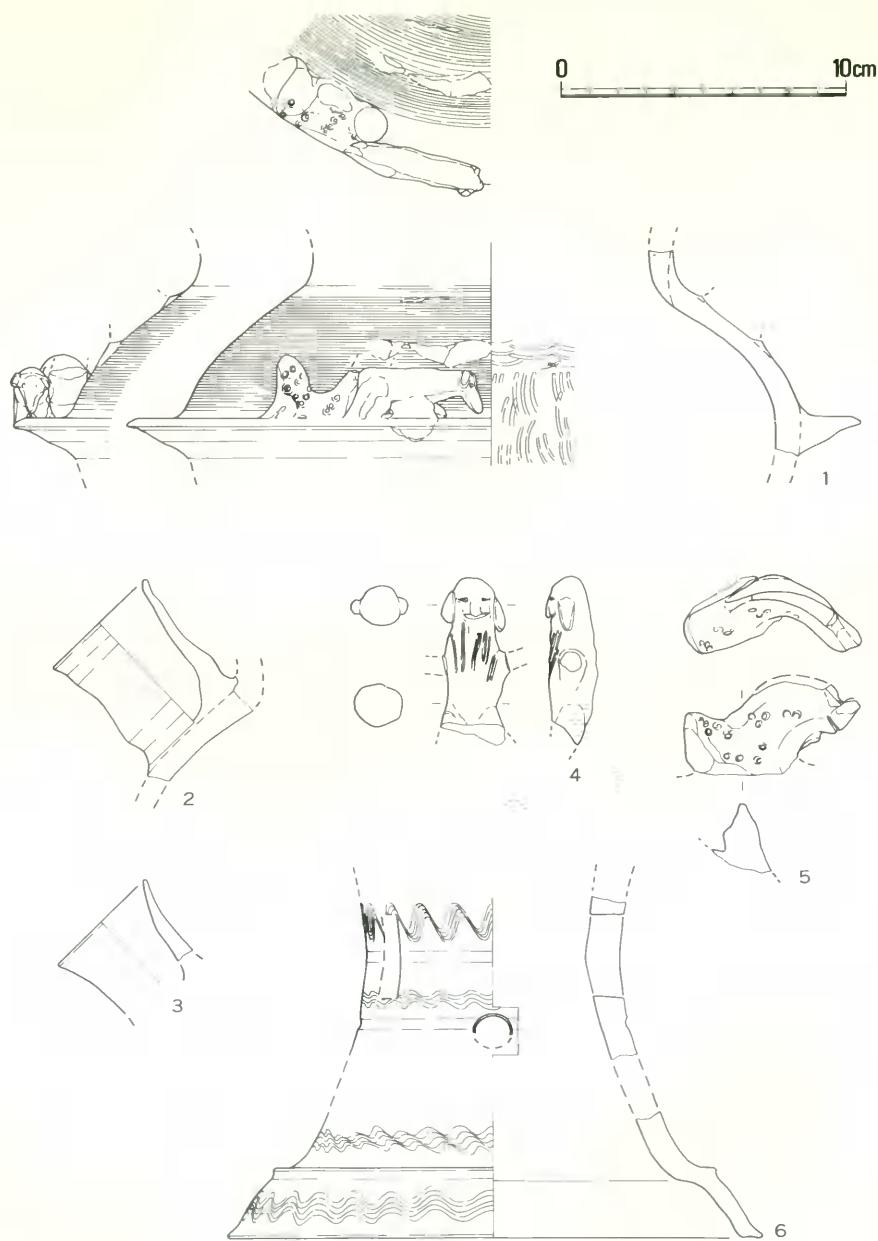
大甌（第12図—32） 他の甌と比べて、口径が約2倍ある大形の甌で、器壁もかなり厚い。

蓋（第13図） 大形の蓋で鉢形をなしており、天井部の中央には環状のつまみがつく。つまみの穴はそのまま貫通しており、その内面は丁寧になでられている。類例が少ないが、甌あるいは甌の蓋と思われる。

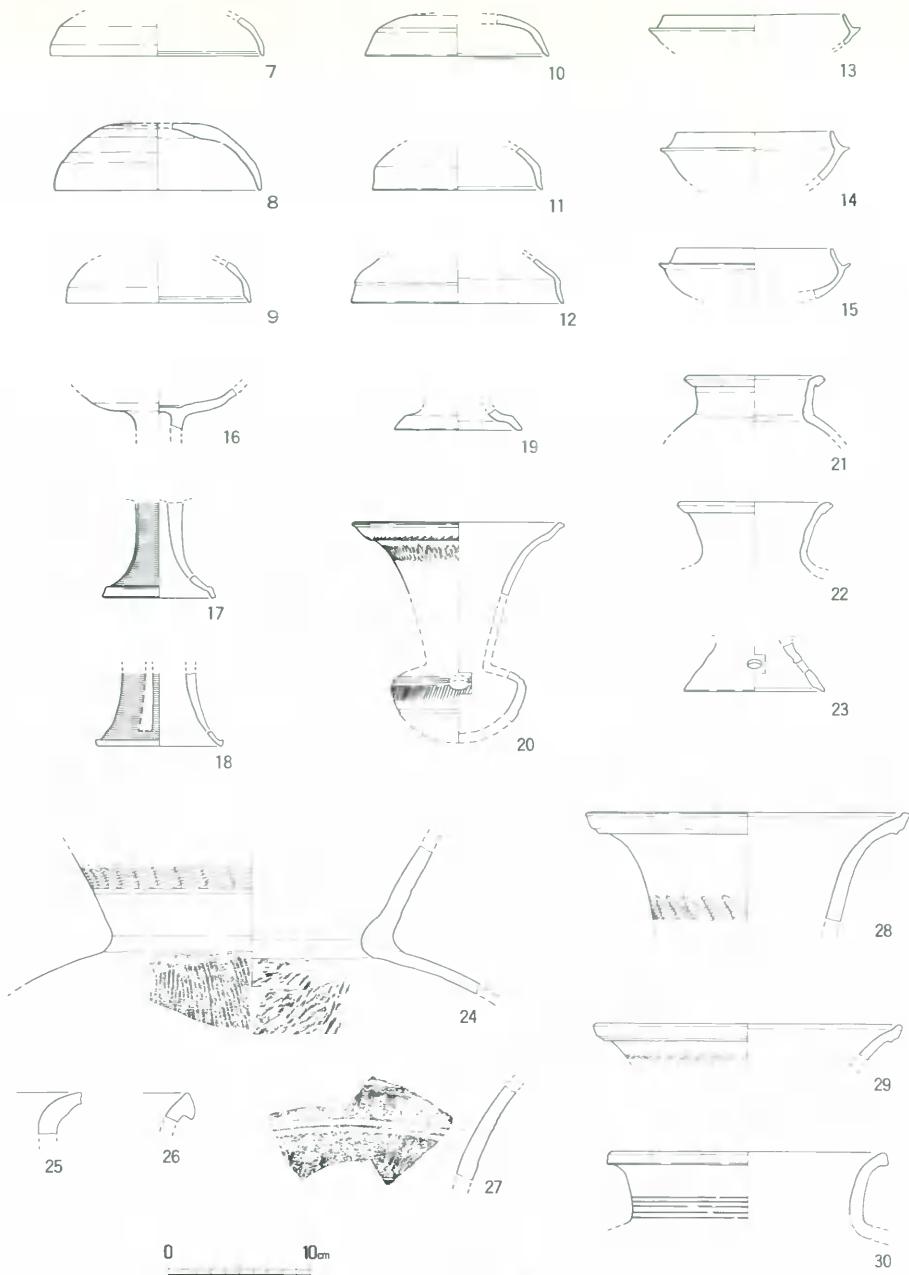
##### b 土師器（第14図）

後円部中央の攪乱壙より出土した資料で、有蓋高坏と考えられる。橙色を呈するものであるが、形態は須恵器に非常によく似ている。調整も、蓋の天井部と坏部の底部に回転ヘラケズリを施すなど、須恵器と共通するものであり、須恵器模倣の土師器あるいは生焼けの須恵器と考えられる。

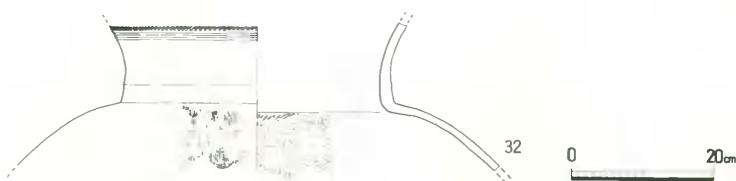
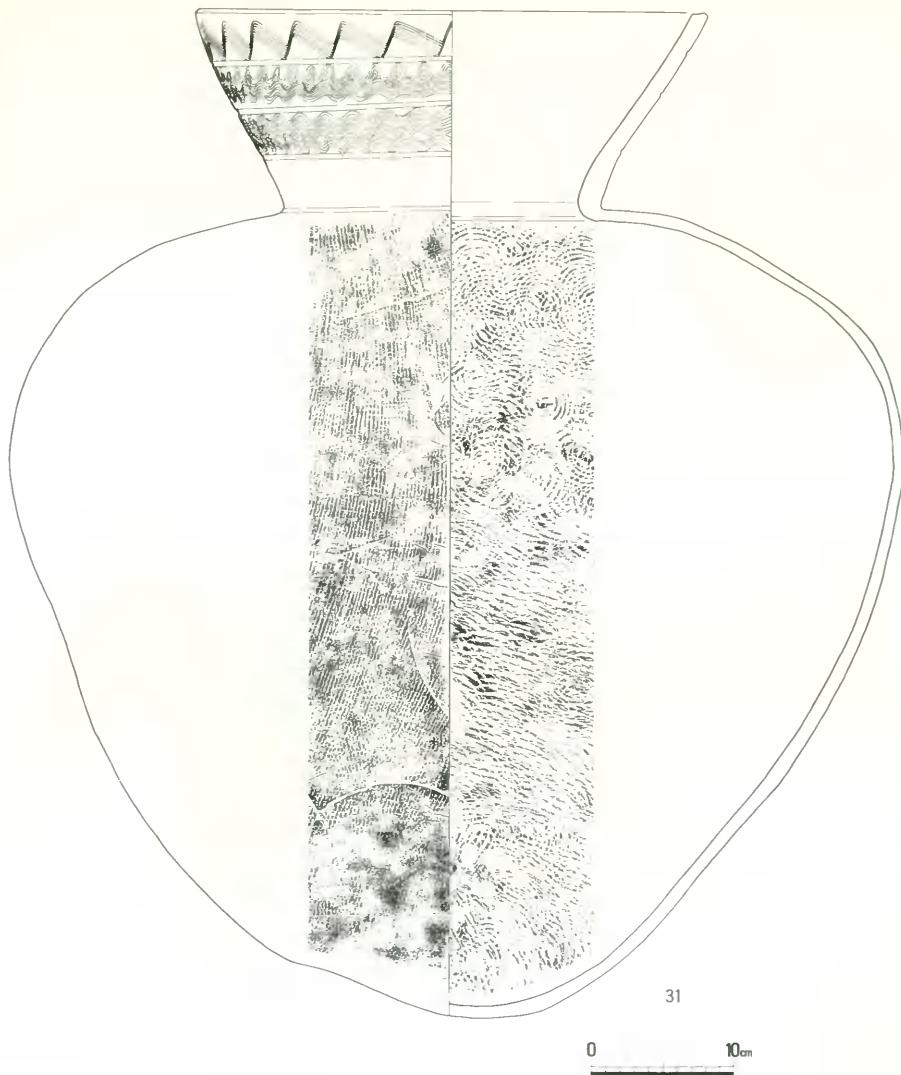
##### c 鉄滓・炉壁（第1表）



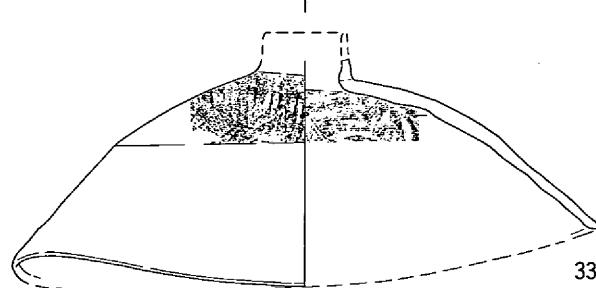
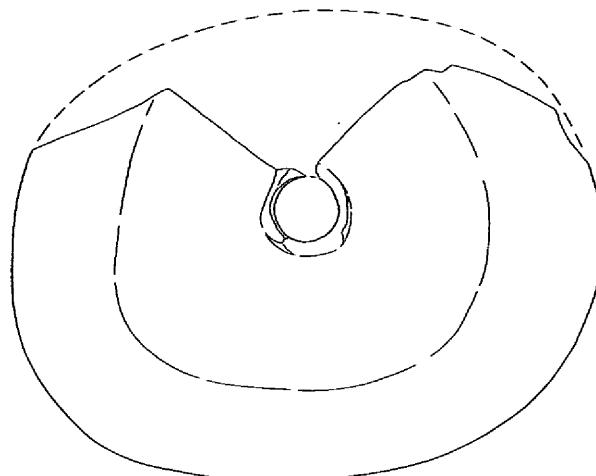
第10図 1号墳出土須恵器 1 装飾付壺 (1/2)



第11図 1号墳出土須恵器 2 (1 / 4)

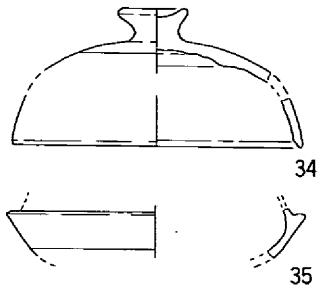


第12図 1号墳出土須恵器③ (1/4, 1/8)



0 10cm

第13図 1号墳出土須恵器④(1/4)



第14図 1号墳出土土師器(1/4)

番号	種別	重量(g)	特 徴 等	出 土 場 所	番号	種別	重量(g)	特 徴 等	出 土 場 所
S 1	炉壁	53.3	スサの痕跡あり	周堀内	S 34	炉壁	63.9		周堀内
S 2	"	44.3	"	"	S 35	鉄滓	142.2		"
S 3	"	139.2	"	"	S 36	"	79.2		"
S 4	"	364.7	"	"	S 37	炉壁	4.7	赤化が著しい	"
S 5	"	129.0	" 赤化部分あり	"	S 38	"	11.9	スサの痕跡あり	"
S 6	"	176.0	"	"	S 39	鉄滓	112.0		"
S 7	鉄滓	1014.9	約17×11cmの大形品	"	S 40	"	18.2		"
S 8	"	67.1		"	S 41	"	117.3		"
S 9	"	109.4		"	S 42	"	34.8		"
S 10	炉壁	47.6		"	S 43	"	87.4		"
S 11	鉄滓	18.1		"	S 44	"	41.3	鉄分が多く、大きさに比して重い	"
S 12	"	583.7	鉄分が多く、大きさに比して重い	"	S 45	"	22.6		"
S 13	炉壁	117.0	スサの痕跡あり	"	S 46	"	23.0		"
S 14	"	53.7	"	"	S 47	"	94.6		"
S 15	鉄滓	96.0		"	S 48	"	16.2		"
S 16	"	67.7		"	S 49	"	30.9		"
S 17	"	57.2		"	S 50	"	53.9		"
S 18	"	208.3	鉄分が多く、大きさに比して重い	"	S 51	炉壁	52.4		"
S 19	"	8.1		"	S 52	鉄滓	287.8		"
S 20	"	118.9	鉄分が多く、大きさに比して重い	"	S 53	"	87.4		"
S 21	"	18.3		"	S 54	"	47.6		"
S 22	"	140.1		"	S 55	"	11.3		"
S 23	"	305.4		"	S 56	"	191.0	鉄分が多く、大きさに比して重い	"
S 24	"	153.1		"	S 57	"	42.6		"
S 25	"	17.9		"	S 58	炉壁	11.4	スサの痕跡あり	"
S 26	"	6.7		"	S 59	鉄滓	11.3		"
S 27	炉壁	18.5	スサの痕跡あり	"	S 60	"	111.7		"
S 28	鉄滓	27.1		"	S 61	"	32.1		"
S 29	炉壁	27.1		"	S 62	"	737.6		"
S 30	鉄滓	18.1		"	S 63	"	225.2		"
S 31	"	125.8		"	S 64	"	15.3		後円部中央擾乱層
S 32	"	24.9		"	S 65	"	373.5		墳頂
S 33	"	12.1		"	S 66	炉壁	92.1	スサの痕跡あり	周辺

第1表 1号墳出土鉄滓・炉壁観察表

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土	色調	出土場所
1	装飾付壺 肩～胴部	最大径復元26cm	外面カキ目、胴部突帯は横ナデ 内面上半分横ナデ、下半部同心円当て具痕	精致	褐灰色～暗褐灰色	後円部中央攪乱壙
2	装飾付壺 子壺	口径4.6cm 子壺のみの器高5.0cm	内外面とも横ナデ 壺内部部分同心円当て具痕	"	"	北東くびれ部周堀内
3	装飾付壺 子壺	口径復元4.4cm	内外面とも横ナデ	"	褐灰色	後円部中央攪乱壙
4	装飾付壺 人物像	—	鼻と髪は貼りつけ 手づくねによる	"	灰黄色	"
5	装飾付壺 イノシシ像	全長6.2cm	胴体に竹環状の刺突文 手づくねによる、タテガミ部分欠損	"	"	"
6	装飾付壺 脚部	底径復元19cm	円形および長方形あるいは台形の透孔 内外面ともに横ナデ、櫛描波状文をもつ	"	"	"
7	坏蓋	口径復元15cm	口縁端部内面に細い沈線をもつ 内外面ともに横ナデ	1～2mm大の砂粒を含む	褐灰色	"
8	"	口径復元14.4cm 器高復元4.8cm	口縁端部は丸くおさめる 天井部へラケズリ(ロクロ右)、他は横ナデ	精致	暗灰色	周辺
9	"	口径復元13cm	口縁端部にはくぼんだ面をもつ 内外面ともに横ナデ	やや粗い	"	後円部中央攪乱壙
10	"	口径復元13cm	口縁端部にはくぼんだ面をもつ 天井部へラケズリ(ロクロ右)、他は横ナデ	精致	明灰黄色	周辺
11	"	口径復元12cm	口縁端部にはくぼんだ面をもつ 内外面ともに横ナデ	"	"	後円部中央攪乱壙
12	"	口径復元15cm	肩部に段あり、口縁端部は丸くおさめる 内外面ともに横ナデ、器壁がうすい	"	青灰色	墳頂
13	坏身	口径復元12.5cm 最大径復元15cm	口縁端部は丸くおさめる 内外面ともに横ナデ、器壁がうすい	"	"	周辺
14	"	口径復元11cm 最大径復元13.4cm	口縁端部は丸くおさめる 内外面ともに横ナデ	青灰色	"	後円部中央攪乱壙
15	"	口径復元11cm 最大径復元13.6cm	口縁端部は丸くおさめる 内外面ともに横ナデ	1～2mm大の砂粒を含む	"	"
16	高坏	—	内外面ともに横ナデ	約3mm大の砂粒を含む	"	"
17	"	底径復元8cm 脚高6.7cm	脚端部を除く外面カキ目 脚端部・内面横ナデ、1段の透孔	精致	青灰色～褐灰色	"
18	"	底径復元9cm	脚端部を除く外面カキ目 脚端部・内面横ナデ	4mm大以下の砂粒を含む	青灰色	"
19	"	底径復元9cm	内外面ともに横ナデ	精致	灰黄色	"
20	鰐	口径復元15cm 胴部最大径復元9.5cm	口縁部、頸部に櫛描波状文、胴部に刺突文、内外面ともに横ナデ	1～2mm大の砂粒を含む	"	"
21	横瓶	口径復元10cm	口縁～頸部内外面ともに横ナデ 胴部外面横ナデ、内面縦ナデ	精致	"	墳頂
22	"	底径復元11cm	内外面ともに横ナデ	"	"	後円部中央攪乱壙
23	台付壺	端部径復元10cm	端部にはくぼんだ面をもつ 内外面ともに横ナデ、円形透孔の数は不明	細かい砂粒を多く含む	外面暗褐灰色 内面暗灰黄色	"
24	甕	—	頸部は内外面ともに横ナデ、櫛描波状文 胴部外面平行タタキ、内面同心円当て具痕	精致	暗灰黄色	"
25	"	—	口縁端部は肥厚せず、ほぼ垂直の面をもつ 内外面ともに横ナデ	"	外面黒色 内面明褐灰色	周辺
26	"	—	口縁端部断面は三角形状をなす 内外面ともに横ナデ	"	灰黄色～黒色	後円部中央攪乱壙
27	"	—	2条1単位の凹線と、細かい櫛描波状文 内外面ともに横ナデ	"	暗灰黄色	周辺
28	"	口径復元23cm	内外面ともに横ナデ 頸部に櫛描波状文	"	外面暗緑色(自然釉) 内面暗褐色	"
29	"	口径復元22cm	内外面ともに横ナデ 頸部に櫛描波状文	"	外面暗灰色 内面暗褐色	"
30	"	口径復元20cm	口縁端部はやや拡張して面をもつ 内外面ともに横ナデ、頸部に5条の沈線	"	淡灰色	周堀内
31	"	口径36.1cm 胴最大径63.0cm	口縁部3段の文様帶に櫛描波状文 洞部外面平行タタキ、内面同心円当て具痕	"	青灰色	"
32	大甕	—	口縁部に2条1単位の凹線と櫛描波状文 胴部外面平行タタキ、内面同心円当て具痕	"	黒色～明灰黄色	後円部中央攪乱壙 周堀内
33	蓋	口径部最大径31.1cm	天井部外面平行タタキ、内面同心円当て具痕ナデ消し、他は横ナデ	"	明灰色	周堀内(北東くびれ部)

第2表 1号墳出土須恵器観察表

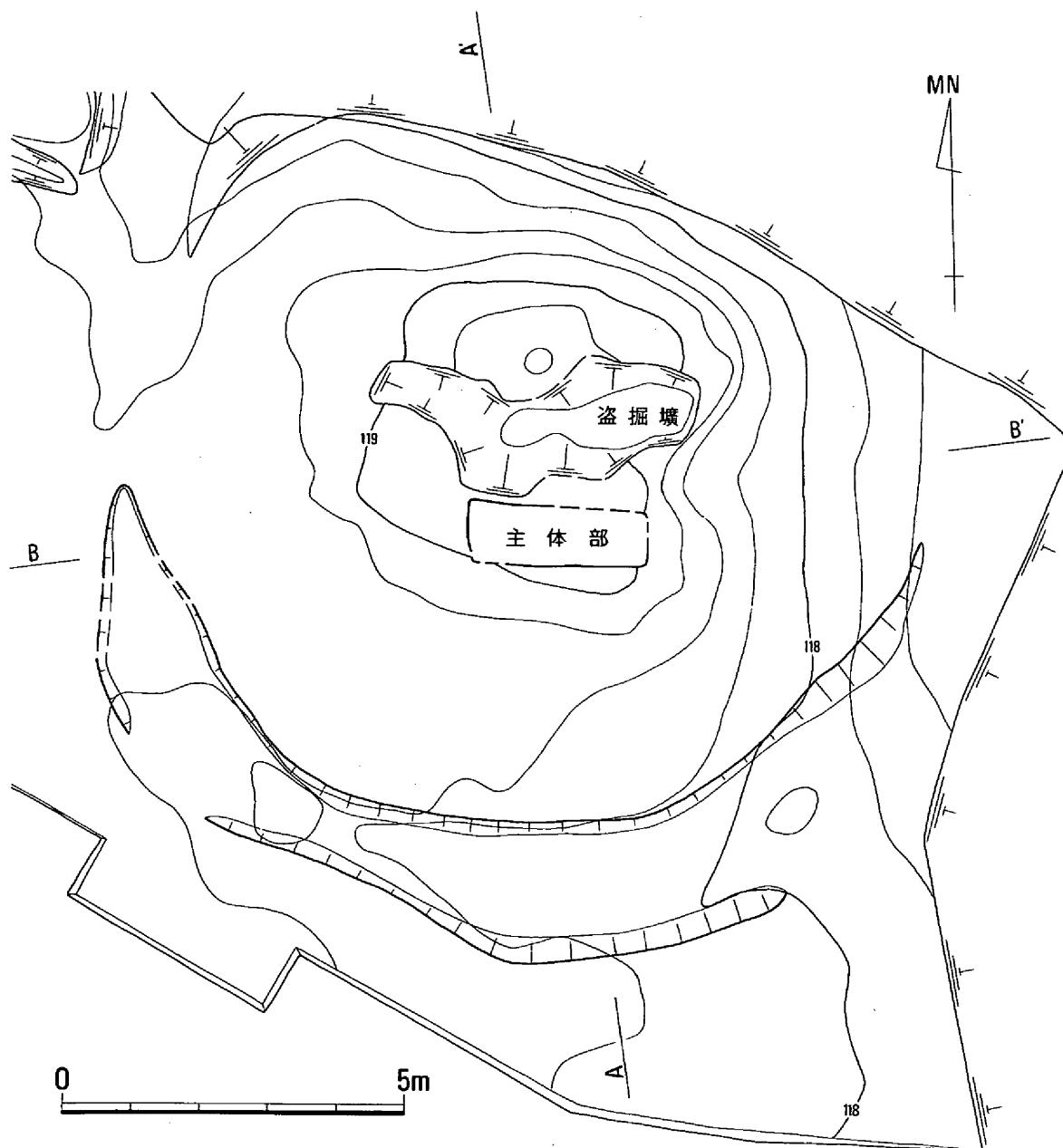
### 第3章 大年古墳群の調査

周堀内及び墳丘各所より、多量の鉄滓・炉壁が出土している。1号墳から出土したもののみで総数66点、総重量7.65kgに及ぶ。鉄滓は鉄分の少ない非常に軽いものから、鉄分を多く含み重いものまでみられる。炉壁はスサの痕跡がよく残っており、熱で赤化している部分もある。

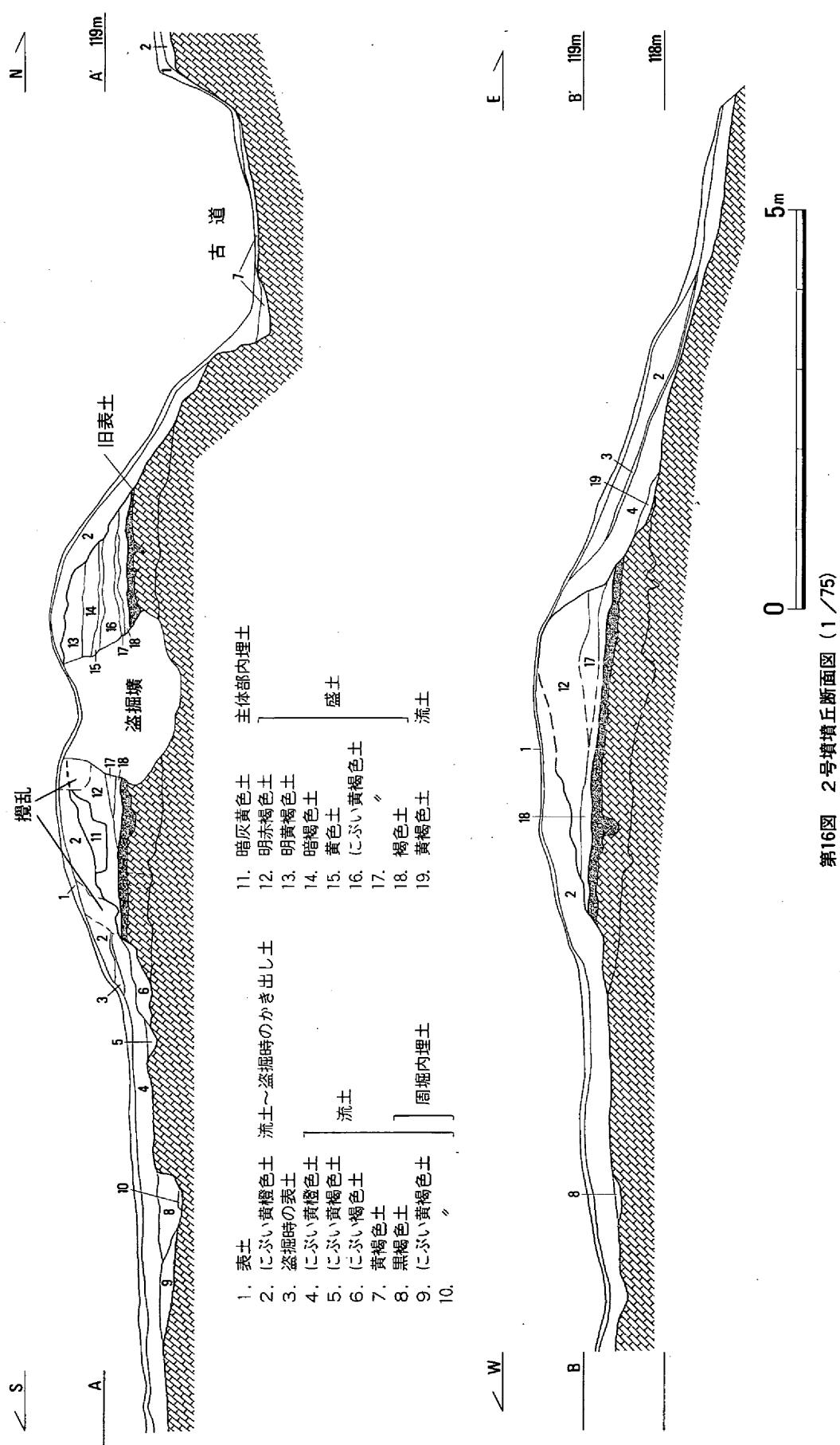
## 第2節 大年2号墳

### 1 墳丘と周堀

2号墳の墳丘は、北側を道によって削られ、その他の部分も削平を受けており、南半部分のみで周堀を確認することができた。この周堀の形態から北半部分も復元すれば、径約12mの円墳になる。墳丘の高さは1m程度が残存しているにすぎない。周堀の深さは南東部が最も深くなっている、検出面からの深さは約45cmである。また周堀の断面形をみると、墳丘側は垂直に近い角度で掘り込まれているのに対して、外側は緩やかな傾斜をもって上がっているのがわかる（第16図A-A' 参照）。



第15図 2号墳墳丘測量図 (1/100)



つぎに盛土の状況であるが、1号墳に比較するとかなり粗雑に積まれている。南北方向の墳丘断面においても、中央の盗掘壙をはさんで北と南では土層が対応しない。旧地表の直上に積まれた17・18層は墳丘全面に広がっているが、それより上では、部分によって盛土の状況がかなり異なっている。少しずつ墳丘の全面に積み上げていくのではなく、墳丘の各部分ごとにある程度まとめて盛土をしていったのではないかと思われる。

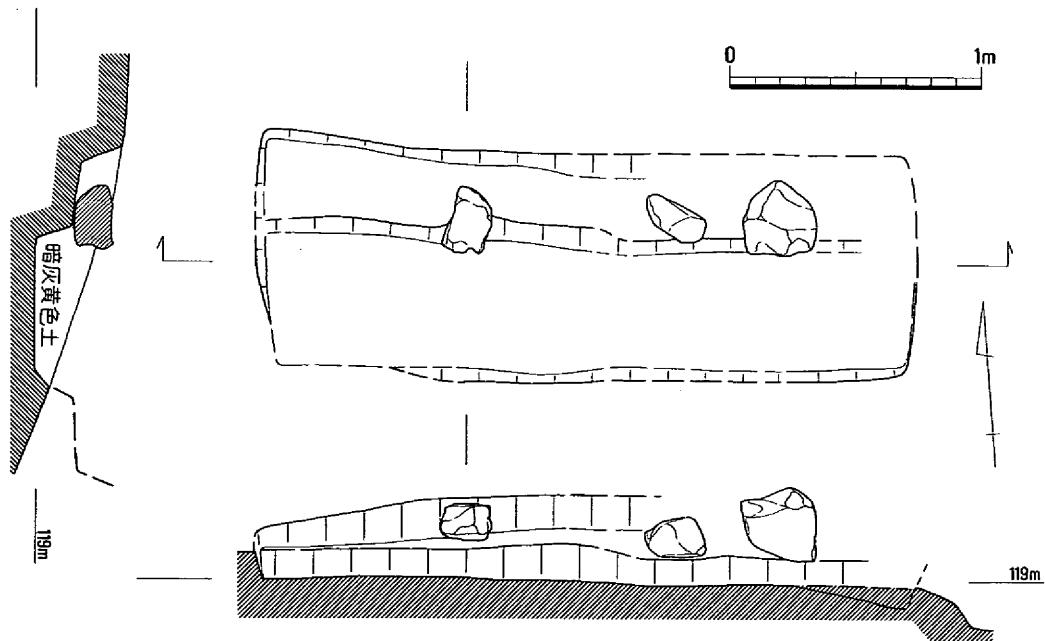
## 2 主体部（第17図）

2号墳の墳丘の中央には盗掘壙が掘られているが、その盗掘壙の南脇に、木棺直葬の主体部が1基検出された。上部を削平されているため、主体部の床から20cm程度しか残存していなかった。墓壙は2段掘りになっており、木棺痕跡は確認できていないが、内側の掘り込みが木棺部分に相当するものと考えられる。内側の掘り込みの肩の部分には3個の石が据えられており、木棺の側板を押さえる役割を果たしたものであろう。2段掘りであることを確認できたのは北側のみであるが、南側は床面に近いレベルまで削平されているので、南側も2段掘りになっていた可能性は高い。現存部分での墓壙の規模は、東西長250cm、南北最大幅92cmであり、内側の掘り込み部分の最大幅は63cmである。また全体的に東方よりも西方の方が若干ではあるが幅が広くなっている、さらに床面のレベルが東方に向かって徐々に下がっていることから、西に頭を向けて埋葬されていた可能性が高いと思われる。

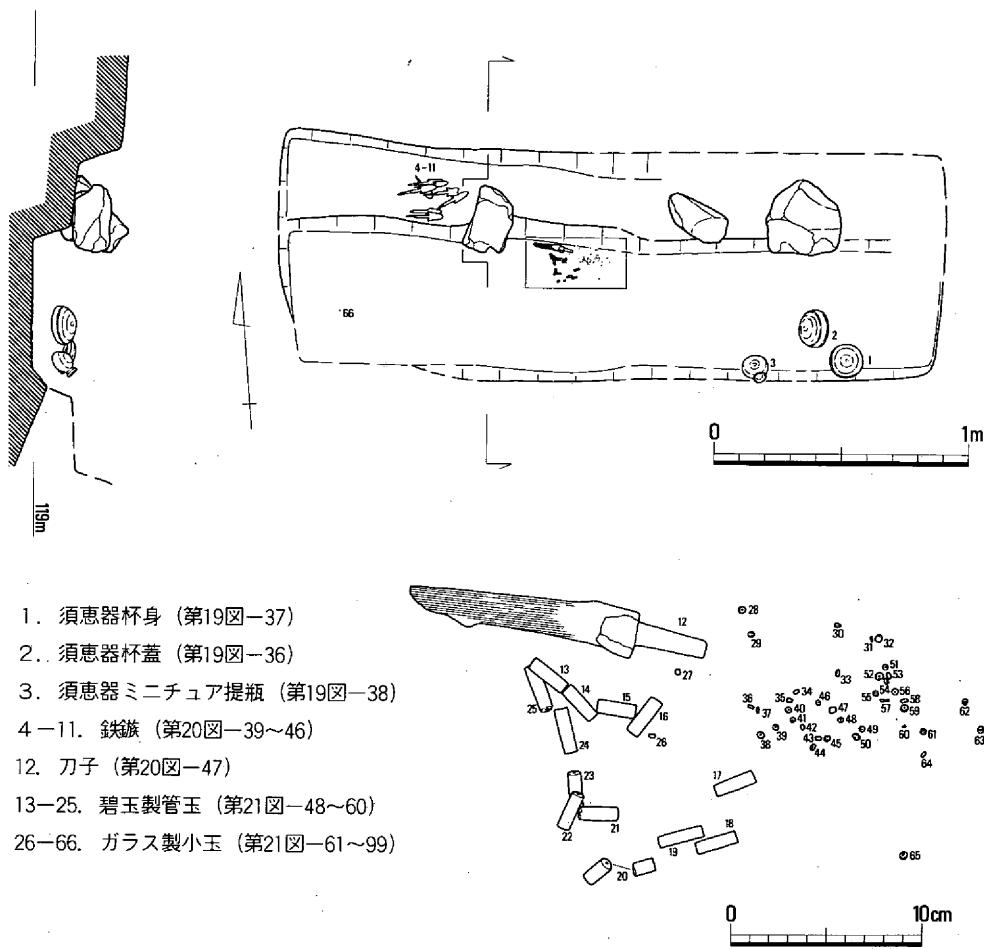
## 3 遺物出土状況（第18図）

2号墳の遺物は、主体部内と、周堀を含む墳丘の各所から出土している。

まず主体部内の遺物についてであるが、上部を削平されていたにもかかわらず、比較的良好な状態で副葬品が残存していた。まず主体部内の棺外と考えられる上段の掘り込み部分西方に、鉄鏸が8本まとめて置かれていた。ほぼすべて鏸身を東側に向いている。つぎに棺内と考えられる内側の掘り込み部分では、東側に、須恵器の坏蓋・坏身のセットとミニチュアの提瓶が検出されている。また中央付近の北寄りには刀子と碧玉製管玉、ガラス小玉がまとまって検出された。管玉と小玉は混在する状況ではなく、それぞれ分かれて出土していることから、別々の飾りとして用いられていたと考えられ



第17図 2号墳主体部 (1 / 30)



第18図 2号墳主体部遺物出土状況 (1/30, 1/4)

る。出土位置から、首飾りよりは腕飾りと思われる。刀子は切先を西に向いている。

一方墳丘では、南側の周堀の中を中心に遺物が出土している。須恵器と埴輪が出土しているが、埴輪は南東部の周堀内に集中して見られ、この付近に立てられていたと思われる。

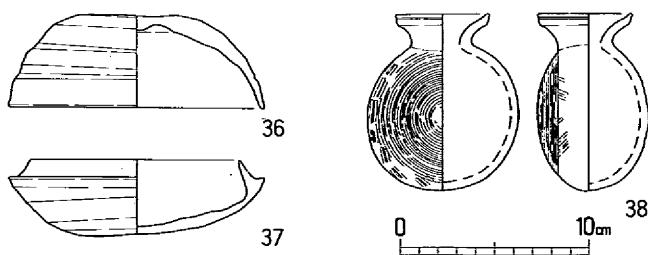
#### 4 出土遺物

##### a 主体部内出土須恵器 (第19図)

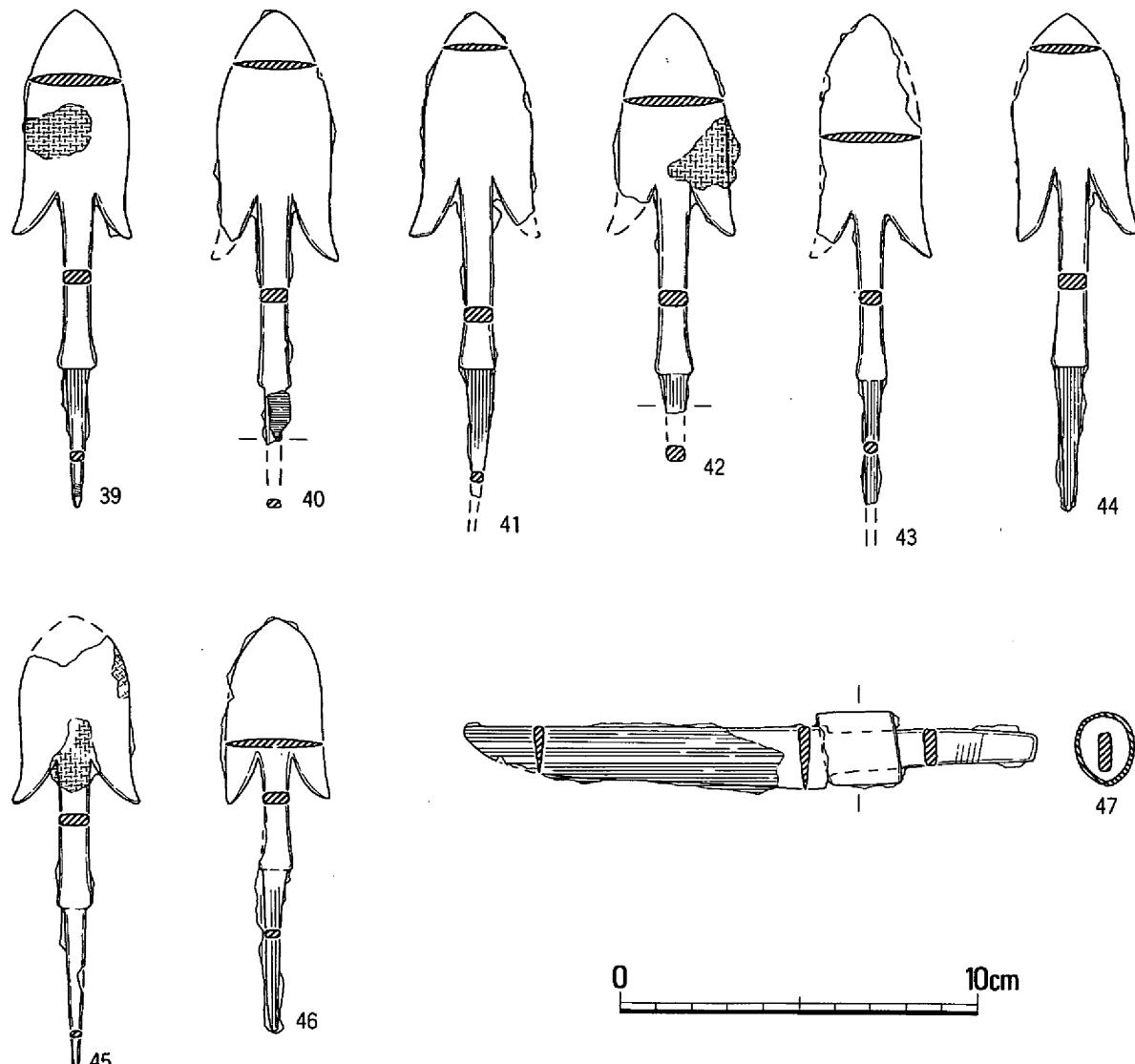
壺蓋・壺身のセットとミニチュアの提瓶が出土している。壺蓋 (36) は端部を丸くおさめ、肩部には段を有する。器高の高いのが特徴的である。壺身 (37) は口縁部の立ち上がりが内傾し端部は尖り気味である。38の提瓶は器高が9.4cmのミニチュア品であるが、調整など通常のものと変わらない丁寧な作りである。

##### b 鉄鎌 (第20図-39~46)

すべて同一型式である。有茎の平根式鉄鎌で、鎌身の形態から腸抉柳葉式に分類される。いずれも笠被闕に棘状突起はもたない。鎌身に布の付着しているものがあり、かなり目の粗い平織りの布である。40は矢柄表面の口巻が残存



第19図 2号墳主体部内出土須恵器 (1/4)



第20図 2号墳主体部内出土鉄器（1／2）

図番号	型 式	全長	鎌身長	鎌身最大幅	頸部長	茎長	重量	備 考
39	平根・腸抉柳葉式	13.9	6.4	3.3	5.0	3.8	20.7	鎌身に布付着、茎に糸巻き・矢柄木質残存
40	"	欠損	7.4	欠 損	5.4	欠損	25.5	茎に矢柄木質と口巻(糸) 残存
41	"	欠損	6.3	欠 損	5.4	欠損	20.4	茎に矢柄木質残存
42	"	欠損	6.3	欠 損	5.3	欠損	20.1	鎌身に布付着、茎に矢柄木質残存
43	"	欠損	6.9	欠 損	4.7	欠損	17.2	茎に矢柄木質残存
44	"	13.9	6.4	3.4	5.5	4.0	16.7	茎に矢柄木質残存
45	"	欠損	欠損	3.5	4.1	4.6	11.8	鎌身に布付着
46	"	11.6	5.2	2.9	3.1	4.6	13.4	茎に矢柄木質残存

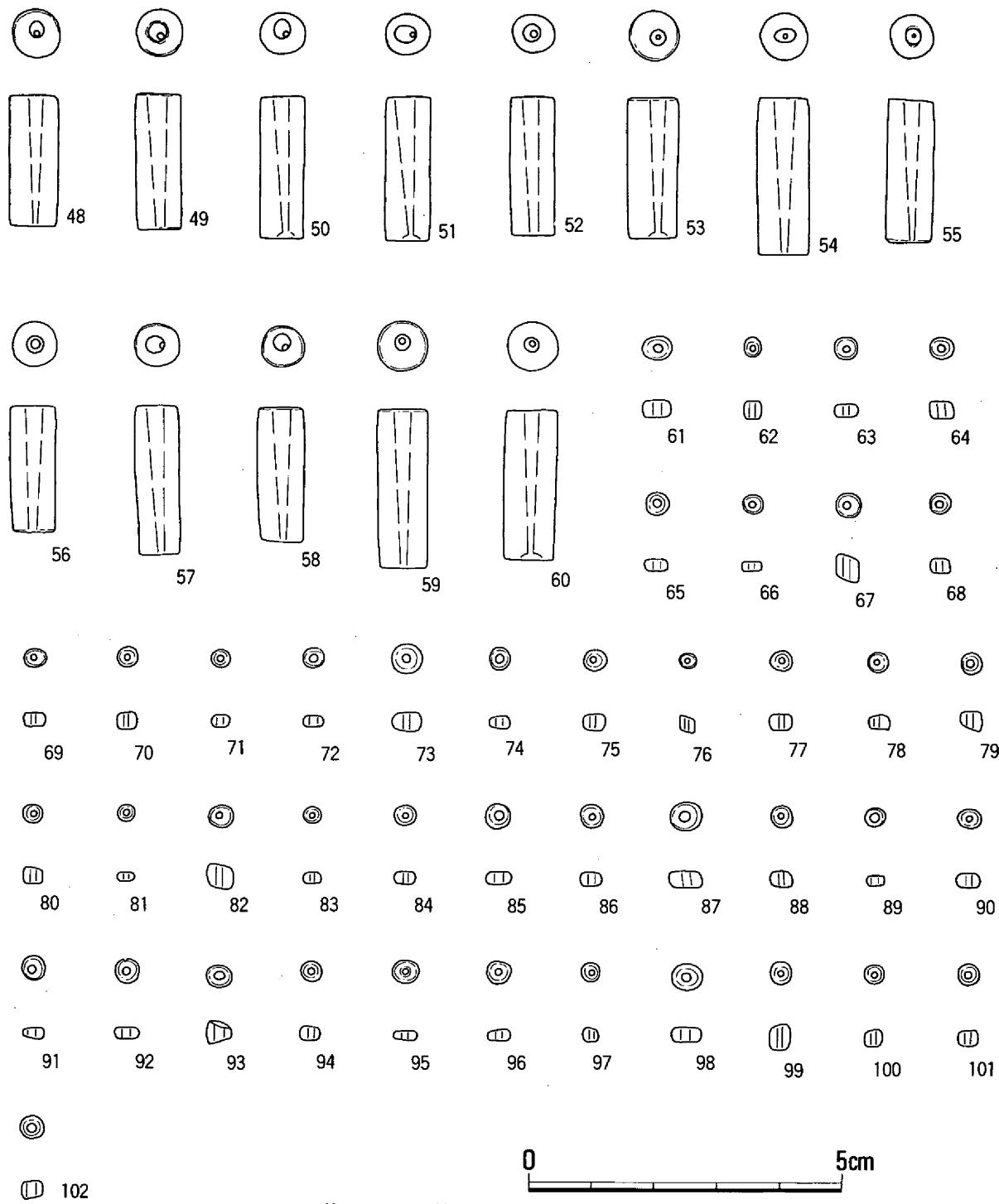
第3表 2号墳主体部出土鉄鎌観察表

(単位はcm、g)

しているが、樹皮でなく糸を巻いている点で非常に珍しい。

### c 刀子（第20図-47）

全長16.0cm、刀身長10.1cm、茎長5.9cmで、関は両関である。鋸は断面倒卵形で下側に縦目がある。



第21図 2号墳主体部内出土玉類 (1/1)

刀身には鞘の木質が、茎には紐を巻いた痕跡が残っている。

#### d 玉類 (第21図)

碧玉製管玉とガラス製小玉があり、詳細は第4表に示した。管玉は基本的にすべて片面穿孔であるが、反対の面から迎孔を穿つものが見られる。ガラス製小玉は、色調から4種類程度の材質に分けられるが、形態との相関関係や、出土状況との関係は特に認められない。

#### e 墳丘・周堀出土の須恵器 (第22図)

### 第3章 大年古墳群の調査

実測図 番号	第18図 番号	種別	材質	色調	長径	短径	最大高	孔 径		備考
								上	下	
48	13	管玉	碧玉	濃緑	7.85	7.8	20.9	2.2	0.7	
49	14	"	"	"	7.25	7.25	21.7	3.05	0.85	
50	15	"	"	"	7.0	6.9	22.6	2.8	0.9	迎孔有
51	16	"	"	"	7.0	6.75	23.0	3.2	0.85	迎孔有
52	17	"	"	"	6.8	6.75	22.3	2.6	1.1	
53	18	"	"	"	8.0	8.0	22.7	2.55	1.2	迎孔有
54	19	"	"	"	7.8	7.7	24.8	3.1	0.8	
55	20	"	"	"	7.0	6.9	23.2	2.2	0.9	
56	21	"	"	"	7.1	7.1	20.3	2.4	1.1	
57	22	"	"	"	7.1	6.95	23.8	2.8	1.0	
58	23	"	"	"	7.2	7.0	21.5	2.6	0.8	
59	24	"	"	"	8.1	8.0	25.6	2.4	0.7	
60	25	"	"	"	8.1	8.1	24.0	2.4	0.7	迎孔有
61	26	小玉	ガラス	淡青	4.6	4.0	3.7	1.4		
62	27	"	"	紺	3.0	2.95	2.85	1.2		
63	28	"	"	淡緑	4.3	4.1	2.25	1.1		
64	29	"	"	淡青	3.8	3.45	2.5	1.1		
65	30	"	"	淡緑	4.1	4.0	2.1	1.6		
66	31	"	"	紫	3.3	3.25	1.5	1.5		
67	32	"	"	淡緑	4.1	4.0	3.7	1.2		
68	33	"	"	淡青	3.3	3.0	2.2	1.05		
69	34	"	"	淡緑	3.7	3.2	2.5	0.9		
70	35	"	"	"	3.5	3.4	2.8	1.15		
71	36	"	"	淡青	3.0	3.0	1.5	1.15		
72	37	"	"	"	3.3	3.1	1.4	1.3		
73	38	"	"	"	5.1	4.8	2.95	1.4		
74	39	"	"	"	3.55	3.5	1.65	1.4		
75	40	"	"	淡緑	3.8	3.6	2.4	1.15		

実測図 番号	第18図 番号	種別	材質	色調	長径	短径	最大高	孔径	備考
76	41	小玉	ガラス	淡青	2.8	2.8	2.0	1.1	
77	42	"	"	紺	3.5	3.3	2.45	1.1	
78	43	"	"	淡青	3.3	3.1	2.2	1.0	
79	44	"	"	"	3.9	3.6	2.65	1.5	
80	45	"	"	"	3.15	3.05	2.65	1.0	
81	46	"	"	"	3.0	2.95	1.7	1.1	
82	47	"	"	淡緑	3.9	3.7	3.3	1.3	
83	48	"	"	紺	3.0	2.8	1.9	1.0	
84	49	"	"	淡緑	3.65	3.35	2.3	1.2	
85	50	"	"	"	4.3	4.25	2.2	1.5	
86	51	"	"	淡青	3.9	3.75	2.55	1.1	
87	52	"	"	紺	4.8	4.5	2.9	1.6	
88	53	"	"	"	3.3	3.1	2.3	1.2	
89	54	"	"	紫	3.2	2.9	1.35	1.3	
90	55	"	"	淡青	3.6	3.2	2.3	1.1	
91	56	"	"	紺	4.9	3.7	1.7	1.6	
92	58	"	"	淡青	4.2	3.7	1.8	1.35	一端に抉り有
93	59	"	"	紺	4.4	4.15	3.9	1.45	
94	61	"	"	淡青	3.6	3.5	2.5	1.1	
95	62	"	"	淡緑	4.4	4.0	1.9	1.5	
96	63	"	"	淡青	4.2	3.5	2.35	1.35	
97	64	"	"	"	3.35	3.0	2.4	0.9	
98	65	"	"	紺	5.1	4.6	2.8	1.6	
99	66	"	"	"	3.8	3.6	3.7	1.0	
100	—	"	"	淡青	3.3	3.1	2.7	1.3	排土中出土
101	—	"	"	"	3.6	3.3	2.15	1.2	"
102	—	"	"	"	3.9	3.8	2.35	1.4	"

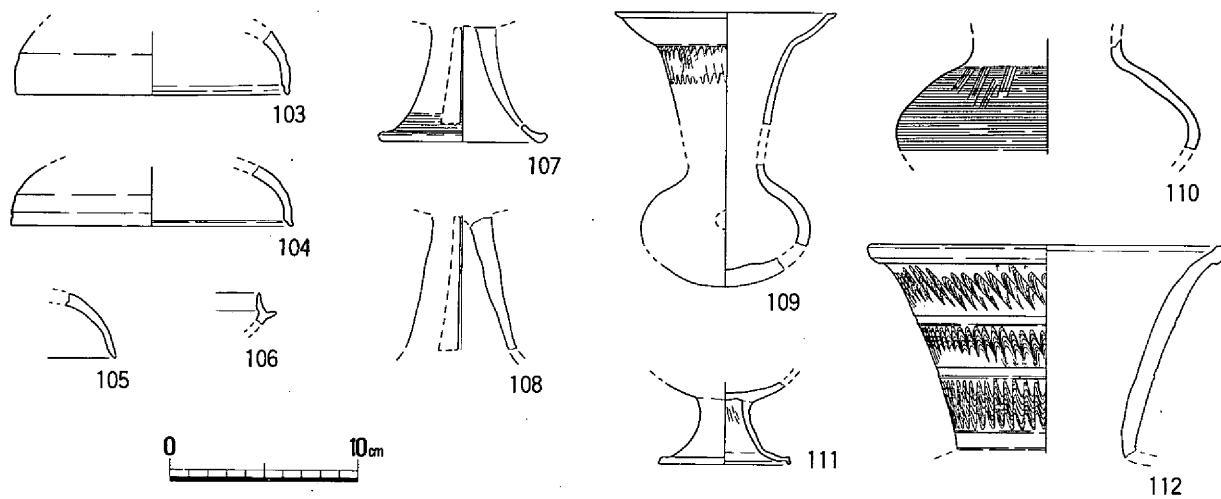
(単位はmm)

第4表 2号墳主体部出土玉類観察表

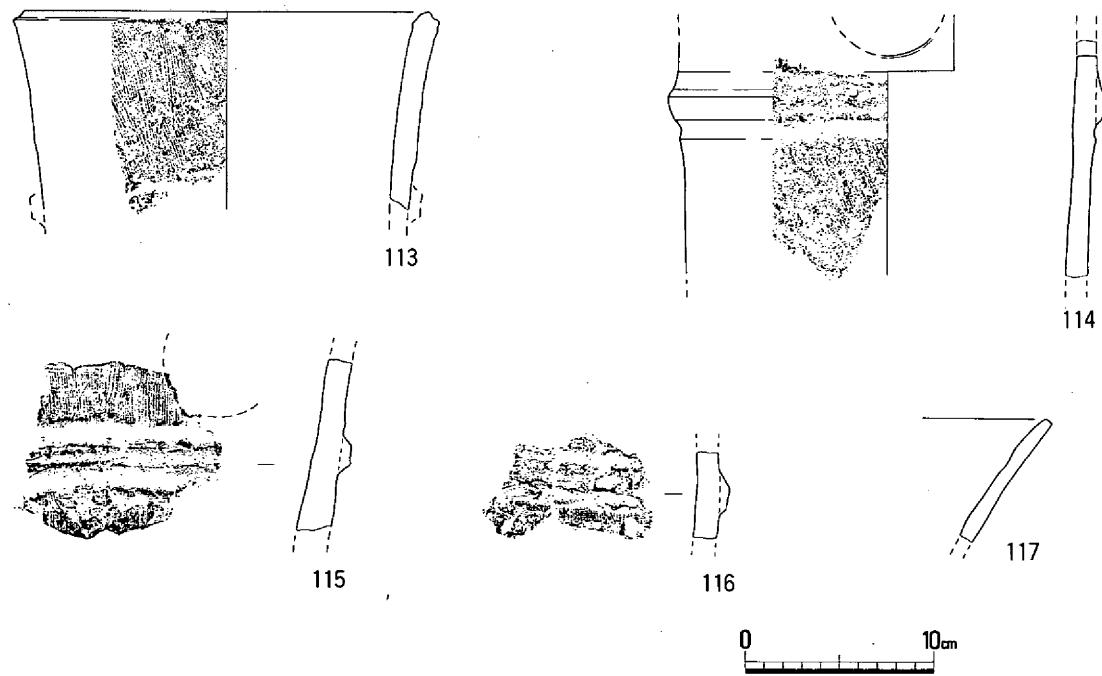
103～105は坏蓋で、103・104は口縁端部に内傾する面ないし段を有し、主体部出土のものよりは古い様相を示している。106は坏身で、口縁部立ち上がりは低い。107・108は高坏で、いずれも脚部に1段の透かしをもつ。109は壇であり、胴部の肩が丸みを帯びて稜線をもたないのが特徴的である。頸部には不明瞭な櫛描波状文が見られる。110は壺の胴部である。111・112は周堀内からの出土で、111は短脚で透かしをもたない高坏、112は広口壺の頸部～口縁部であり、二条の凹線によって区画された三つの文様帶には櫛描波状文が施されている。111の高坏は7世紀代の型式であり、2号墳に直接伴うものとは考えにくい。

#### f 墟輪（第23図）

113と117は口縁部である。113は円筒埴輪であるが、117は外反する形態を示しており、朝顔形埴輪のものと考えられる。外面の調整は基本的に縦方向のハケ目であるが、わずかに不明瞭ながら横方向の調整痕を残す部分がある。突帯はハケ目を施した後に貼りつけ、二次調整は行なっていない。114は右下がりのやや斜め方向のハケ目を施している。内面の調整は、1.5～2cm前後の単位をもつ粗い縦方向のナデである。117は、表面が風化しており明確な調整痕が観察できないが、内外面ともに比較的丁寧なナデ調整であると思われる。突帯の断面形は外面にくぼみをもつ台形をなすもの（115・116）



第22図 2号墳埴丘および周堀出土須恵器 (1/4)



第23図 2号墳周堀出土埴輪片 (1/4)

と、丸みを帯びた退化形態をとるもの（114）がある。また114・115は径約6cmに復元される円形の透かしをもっている。色調はいずれも黄橙色を呈し、113・115の外面の一部には赤色顔料を塗布した痕跡が残っている。焼成はあまり良くないが、115の資料のみ断面が灰色を呈し比較的硬く焼かれている。出土した埴輪片は、図示したもののほかにはごくわずかな小片が数点認められるのみであり、2号墳に本来立てられていた埴輪の個体数は、円筒埴輪・朝顔形埴輪を含めてせいぜい2～3個体であったと思われる。

#### g 鉄滓・炉壁（第6表）

1号墳と同様の鉄滓・炉壁が、総数15点、総重量1.17kg出土している。

### 第3章 大年古墳群の調査

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土	色調	出土場所
36	壺蓋	口径13.7cm、器高5.0cm	天井部ヘラケズリ(クロ右回り) その他横ナデ、端部は丸くおさめる	精致	青灰色～褐色	主体部内
37	壺身	口径11.2cm、最大径13.6cm 器高4.2cm	底部ヘラケズリ(クロ右回り) その他横ナデ	2～3mm大の砂粒を含む	青灰色	"
38	ミニチュア提瓶	口径5.0cm、器高9.4cm 胴部長径8.0cm、短径5.9cm	口縁部内外面とも横ナデ、胴部外面平行タタキの後ナデ消し・カキ目	精致	青灰色～褐色	周辺
103	壺蓋	口径復元14.4cm	口縁部内面に沈線 内外面ともに横ナデ	1～4mm大の砂粒を少量含む	灰色	周辺
104	"	口径復元15cm	端部にくぼんだ面をもつ 内外面ともに横ナデ	精致	青灰色	"
105	"	—	端部は丸くおさめる 内外面ともに横ナデ	"	"	"
106	壺身	—	口縁端部は尖る 内外面ともに横ナデ	"	灰色	"
107	高壺	脚端部径復元9cm 脚高6.1cm	内外面とも横ナデ 脚下半部外面に横ハケ調整痕を残す	2mm大以下の砂粒を含む	明灰色	主体部上
108	"	—	内外面とも横ナデ	精致	"	周堀内
109	甌	口径復元12cm 胴部最大径復元9cm	内外面とも横ナデ 頸部に櫛描波状文	"	黒色～青灰色	墳丘流土
110	壺	最大径復元16cm	頸部外面横ナデ、内面縦ナデ 胴部外面平行タタキの後横ハケ、内面横ナデ	"	青灰色	周堀内
111	高壺	脚端部径7.0cm 脚高3.5cm	内外面とも横ナデ 脚内面上部にしづり痕あり	"	青灰色～暗灰色	周堀内
112	広口壺	口径復元19cm	内外面とも横ナデ、2条の凹線に区切られる 文様帶に櫛描波状文	"	褐色～青灰色	"

第5表 2号墳出土須恵器観察表

番号	種別	重量(g)	特徴等	出土場所
S67	炉壁	18.9		周堀内
S68	"	51.0		"
S69	"	17.6		"
S70	"	147.7		"
S71	炉壁	39.7	スサの痕跡あり	"
S72	鉄滓	23.2		"
S73	炉壁	213.0	スサの痕跡あり、赤化部分あり	周辺
S74	鉄滓	292.0		"

番号	種別	重量(g)	特徴等	出土場所
S75	炉壁	63.2	スサの痕跡あり	周堀内
S76	鉄滓	6.3		"
S77	炉壁	52.2	スサの痕跡あり	"
S78	鉄滓	31.9	鉄分が多く、大きさに比して重い	"
S79	"	98.7		"
S80	"	86.9		"
S81	"	28.5		"

第6表 2号墳出土鉄滓・炉壁観察表

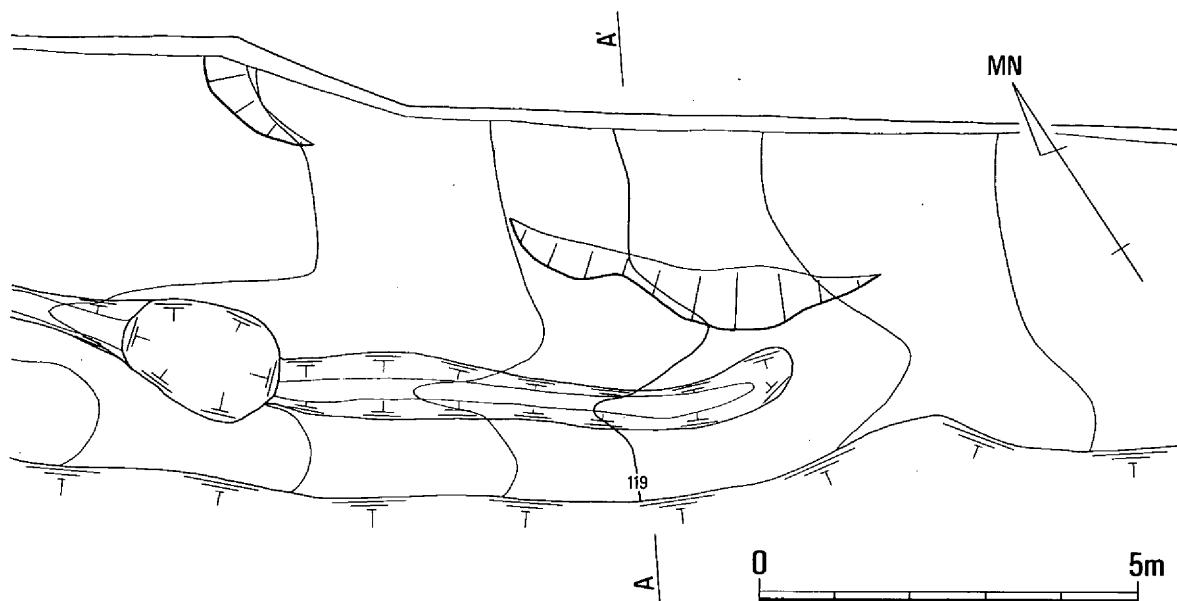
## 第3節 大年4号墳

### 1 周堀

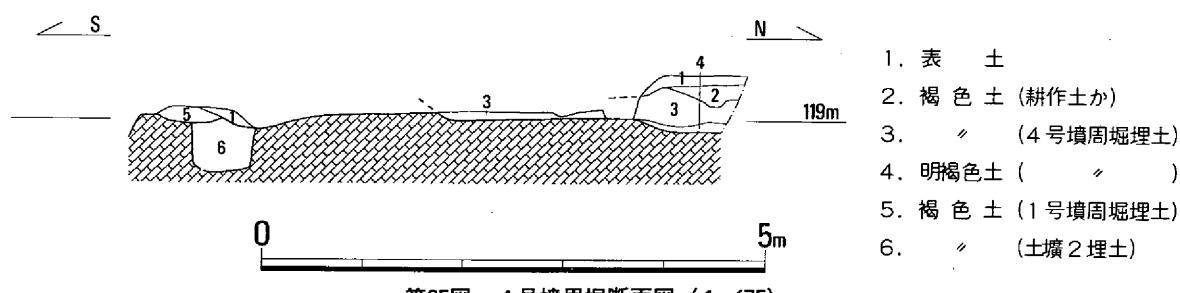
4号墳は、古墳の南西端が調査区内にかかっており、周堀の外側の肩が検出されているにとどまる。その周堀も、良く残っている部分でも深さ20cm程度しか残っていない。したがって、周堀のめぐる平面形も明確ではない。古墳の中心は調査区外の北東側になるが、その部分は現在大きく削られて民家が建てられており、全く残っていない。古墳の規模は10m前後になると思われるが、円墳か方墳かの区別はできない。

### 2 出土遺物

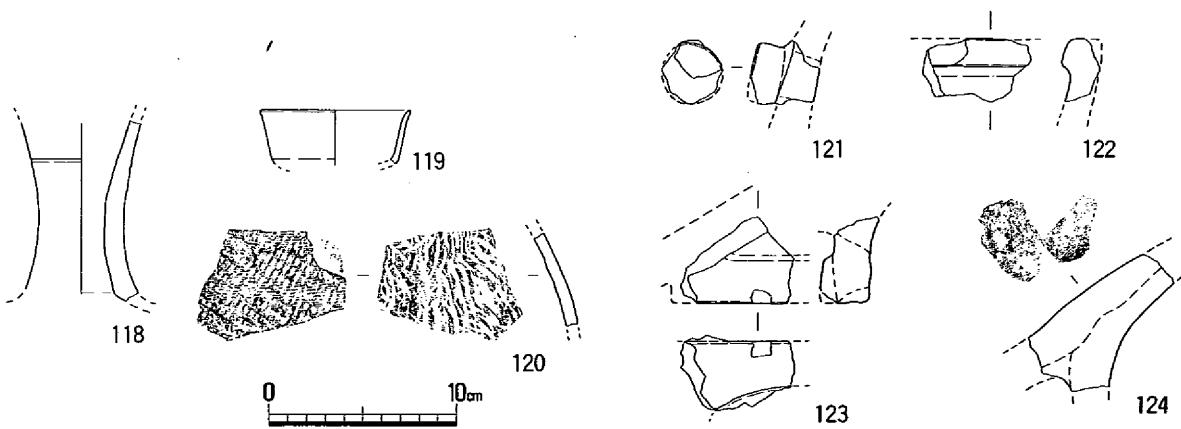
周堀の中および4号墳周辺から若干の遺物が出土している。周堀の中から出土したのは須恵器と鉄滓・炉壁である。第26図-118は周堀内より出土した須恵器長頸壺の頸部、119・120は4号墳周辺採集の須恵器である。118は、灰白色を呈する色調、非常に硬質な焼きなどから、本古墳群出土の他の須恵器とは異質である。非常に良質で胎土に黒色の粒を含むといった特徴から、邑久郡牛窓町寒風窯の製品と考えられる。119は高壺口縁部の破片、120は甌胴部の破片で外面には粗い格子目タタキをもつ。いずれも7世紀代の年代が与えられる。鉄滓・炉壁は、周辺出土のものも含めて総数8点、総重



第24図 4号墳周堀測量図 (1/100)



第25図 4号墳周堀断面図 (1/75)



第26図 4号墳周堀及び周辺出土須恵器 (1/4)

第27図 古道周辺出土陶棺片 (1/8)

### 第3章 大年古墳群の調査

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土	色調	出土場所
118	長頸壺	—	頸部上半に1条の沈線文 内外面とも横ナデ	1mm弱の砂粒を 多量に含む	内・外面灰白色 自然釉灰オリーブ	周堀内
119	高杯	口径復元8cm	口縁端部は尖り氣味に外反する 内外面とも横ナデ	1~3mm大の砂 粒を少量を含む	黒色	周辺
120	甕	—	外面格子目タタキ、横カキ目 内面同心円当て具痕	黒色粒を多く含 む	外面灰色 内面褐灰色	"

第7表 4号墳出土須恵器観察表

番号	種別	重量(g)	特徴等	出土場所
S82	炉壁	306.0	スサの痕跡あり、赤化部分あり	周堀内
S83	鉄滓	341.9		"
S84	"	139.9		"
S85	"	28.2		"

番号	種別	重量(g)	特徴等	出土場所
S86	鉄滓	61.0		周堀内
S87	炉壁	145.5	スサの痕跡あり	周辺
S88	鉄滓	118.6		"
S89	炉壁	28.2	スサの痕跡あり	"

第8表 4号墳出土鉄滓・炉壁観察表

量1.17kgが出土している(第8表)。

また、1号墳と4号墳の間を通る古道周辺より、陶棺片がいくらか出土している(第27図)。121・122は土師質亀甲形陶棺の破片で橙色を呈し、123・124は須恵質切妻家形陶棺の破片で暗灰色を呈する。121は亀甲形陶棺の蓋の突起部分、122は身の上端の突帶部分である。いずれも内外面ともにナデ調整である。123は切妻家形陶棺の蓋の妻部分、124は同じく蓋の庇の付け根部分である。123は身との合わせ目を含めて内外面ともにナデ調整、124は内面ナデ調整で外面の屋根部は縦方向のハケ目調整である。これらの陶棺片は、その年代観から、1号墳ではなく、4号墳に伴うものである可能性が高い。

## 第4節 古墳に伴わない遺構と遺物

本古墳群内は調査以前は耕作地として使用されており、古墳盛土部分を除いて広い緩斜面の平坦地が見られた。

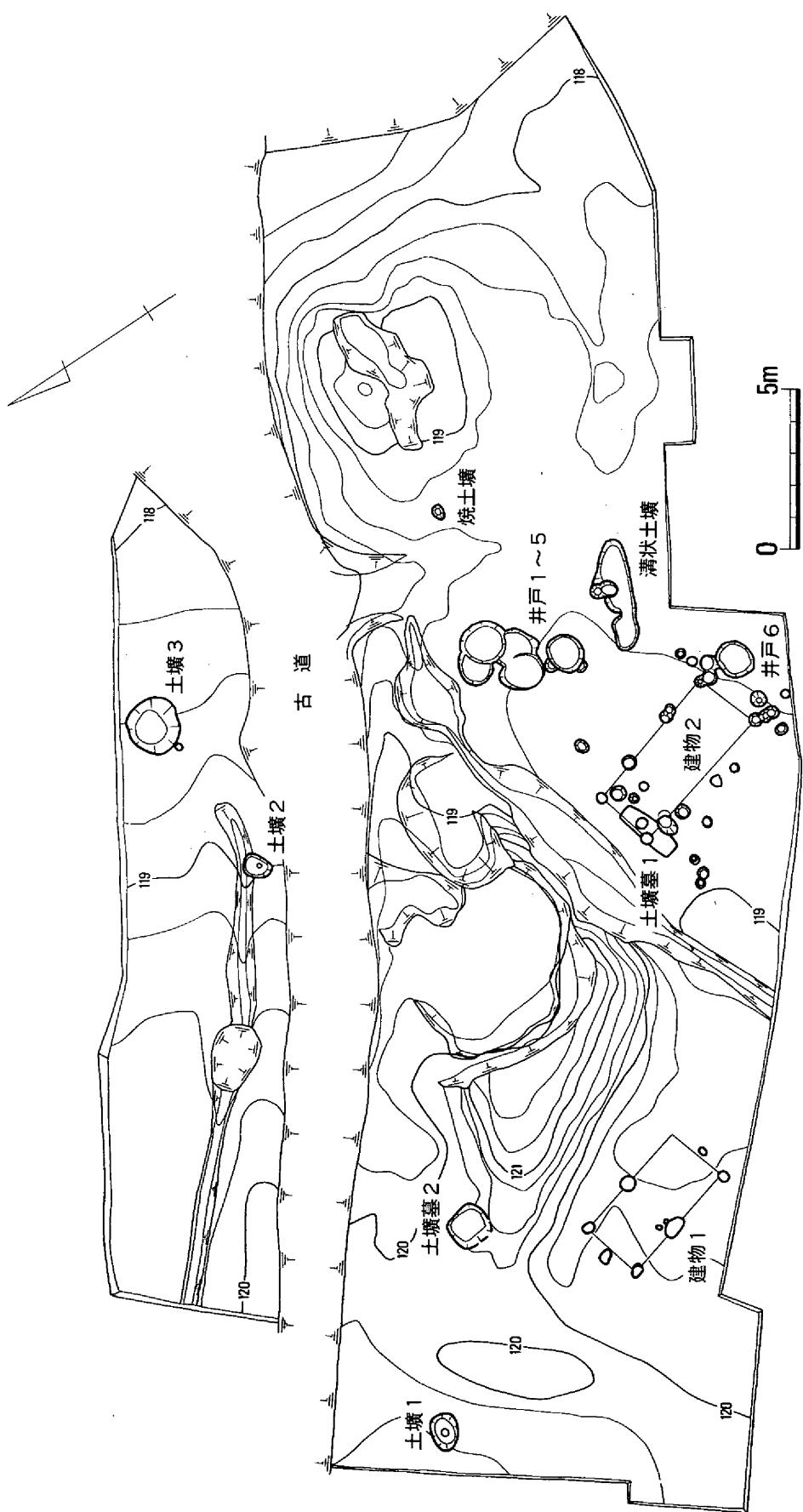
調査地内は表土と褐色の耕作土の2層が堆積しており、これを全面剥いで調査を実施した。この際、古墳時代の遺物と共に全面にわたって遺物の散布が見られ、特に1号墳と2号墳の間で多く見られた。

遺構に伴わない遺物は、耕作等で碎片化しており、器形全体の判別できるものはほとんどなかったが、弥生時代の土器、中世の勝間田焼・備前焼・土師質土器・瓦質土器、近世の肥前系陶磁器・備前焼等があり、特に中世の勝間田焼は勝間田古窯址群に近接することから多量に出土している。

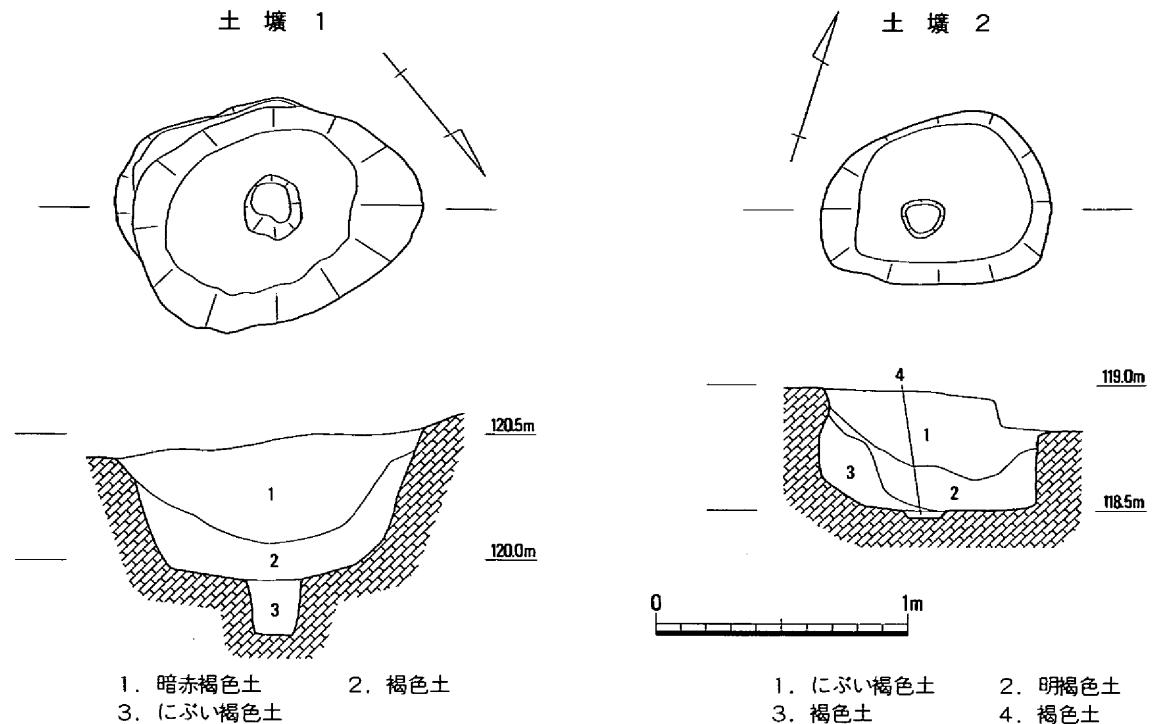
古墳以外の遺構はすべて上面が削平されており遺存状況が悪かったが、近世の柱穴群、井戸6基のほかに時期の不明瞭な土壙4基、土壙墓2基、溝状土壙1基を検出した。

今回の調査で、出土遺物、遺構から本古墳群内では古墳築造以前の生活址は明確にされなかった。しかし、古墳築造以後は、鎌倉時代初頭頃までに1号墳後円部墳丘削平等の地形の大きな改変を行ない、江戸時代前半(17世紀末から18世紀初頭)には掘立柱の建物と井戸をもち、一時期居住地として利用されていたことがわかった。そして江戸時代後半には一部墓地として利用されていくとともに耕作地へと変容されていったと考えられる。

土壙1(第29図) 1号墳前方部周堀の北側で検出した長楕円形の土壙で、長径約120cm、短径約90cm、現存深約56cmで、底部中央に径約20cm、深さ22cmのピットをもつ。底面は比較的水平で、埋土



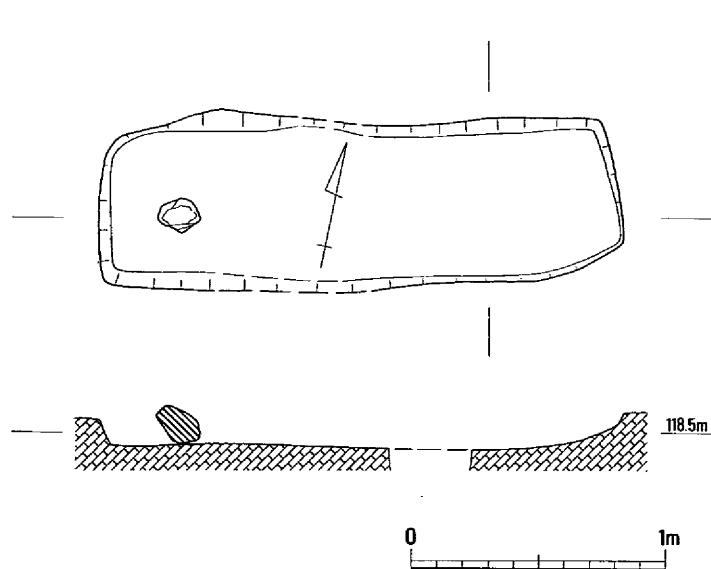
第28図 古墳に伴わない遺構配置図 (1 / 200)



第29図 土壌1・2 (1/30)

は3層に分層されるが、底部中央のピットには柱痕跡は認められなかった。出土遺物が皆無なため時期不明だが、埋土の色調から古墳築造以前の時期で、平面形から落し穴の可能性が推定される。

**土壌2** (第29図) 1号墳北東の周堀により上面が削平された状況で検出した長楕円形の土壌で、長径約93cm、短径約65cm、現存深約46cmで、底部ほぼ中央やや南寄りに径約17cm、深さ3cmのピットをもつ。底面は比較的水平で、埋土は4層に分層されるが、底部のピットには柱痕跡は認められなかった。出土遺物が皆無なため時期不明だが、周堀との関係から1号墳築造以前の時期で、平面形から落し穴の可能性が推定される。



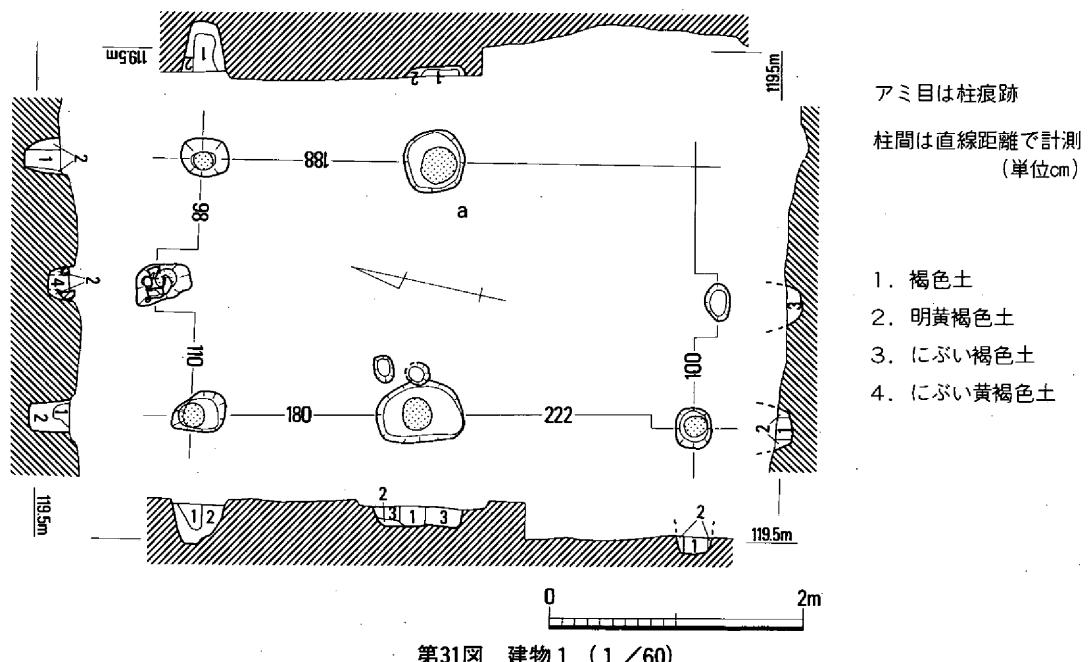
第30図 土壌墓1 (1/30)

**土壌墓1** (第30図) 1号墳後円部の南で検出した。東西約200cm、南北約60cm、現存深15cmの長方形を呈する。上面は後世に削平され、現存する埋土は単層で、西側の床面直上には人頭大の枕石状の礫が見られた。時期は、出土遺物に勝間田焼塊、甕の小片が見られることと、近世の柱穴により一部攪乱されていることから中世と推定される。

**建物1** (第31図) 1号墳南くびれ部の周堀上にかかっ

た状況で検出したが、南端の柱穴列は周堀埋土掘り下げ後に検出したため南東隅の柱穴は確認できていないが、本来は存在していたと考えられる。建物は2間×2間の南北棟の掘立柱建物で、柱間距離は企画性に乏しく、柱穴列も一直線にならない。時期は、柱穴aの上面で出土した遺物から17世紀末以後と考えられる。

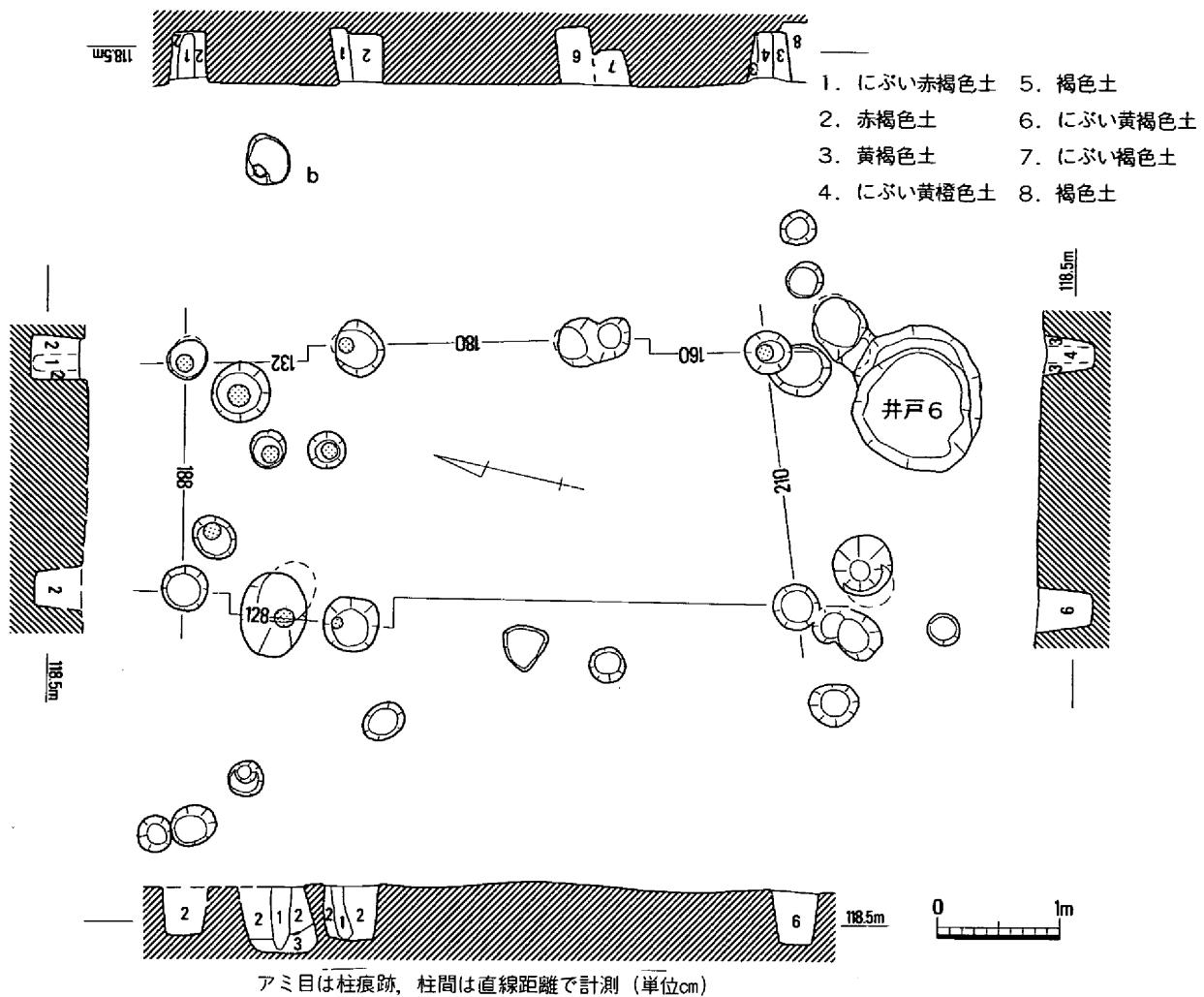
柱穴aの出土遺物（第33図-125）は肥前系陶器の口縁部から胴部の破片で、復元口径10.2cmの壺で全面に透明の灰釉がかかり外面には刷毛目文が見られる。



**建物2**（第32図） 1号墳後円部南側で柱穴群とともに検出した。建物は3間×1間の南北棟の掘立柱建物で柱間距離は企画性に乏しく、平面形は不整方形を呈し、柱穴内の柱痕跡もまちまちな方向を向いている。建物を構成する西側の柱穴列の南から2番目の柱穴は、精査したが検出できなかつた。時期は建物を構成する柱穴からの出土遺物はないが、埋土の色調の似た柱穴bの中の出土遺物が17世紀末頃であったことと、建物1と方位が一致していることから17世紀末以後と考えられる。

柱穴bの出土遺物（第33図-126）は肥前系陶器の底部片で、高台外径は46mm、内面には緑釉、外面には透明の灰釉がかかり、見込みは蛇ノ目釉剥ぎが施されている。高台の一部に目砂痕が見られる。

**井戸1～5**（第34図） 1号墳と2号墳の間の平坦面で検出した。検出当初は全面がやや汚れた地山風化土で埋まつたたわみ状遺構と判断し一気に掘り下げを実施した。しかし、埋土の大半を掘り上げたところで井戸1の井筒痕を検出したため、以後は土層観察を行ないつつ調査を実施した。井戸1～5の平面形はほぼ1～1.5mの円形で、井筒痕を検出した井戸1・4・5では、井筒はそれぞれ径約82cm・74cm・65cmの円形であったと推定される。井戸1・2の土層観察では、1層と3層の境にグライ化した粘土層が見られた（2層）。また、井戸1～5のすべての底部は多少の差異はあるものの、グライ化が確認された。時期は、井戸1は1・3層中の出土遺物から17世紀後半以後の廃絶と考えられ、井戸2～5も井戸1との前後関係は不明ながらほぼこの時期に廃絶したと考えられる。また、使用期間については、遺構の構造が簡易なことと切り合い関係が顕著なことから短期間の使用が

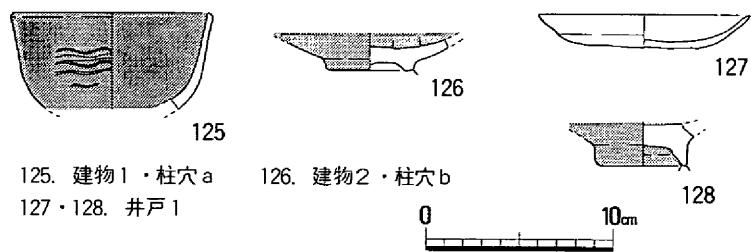


第32図 建物2及び周辺の柱穴（1/60）

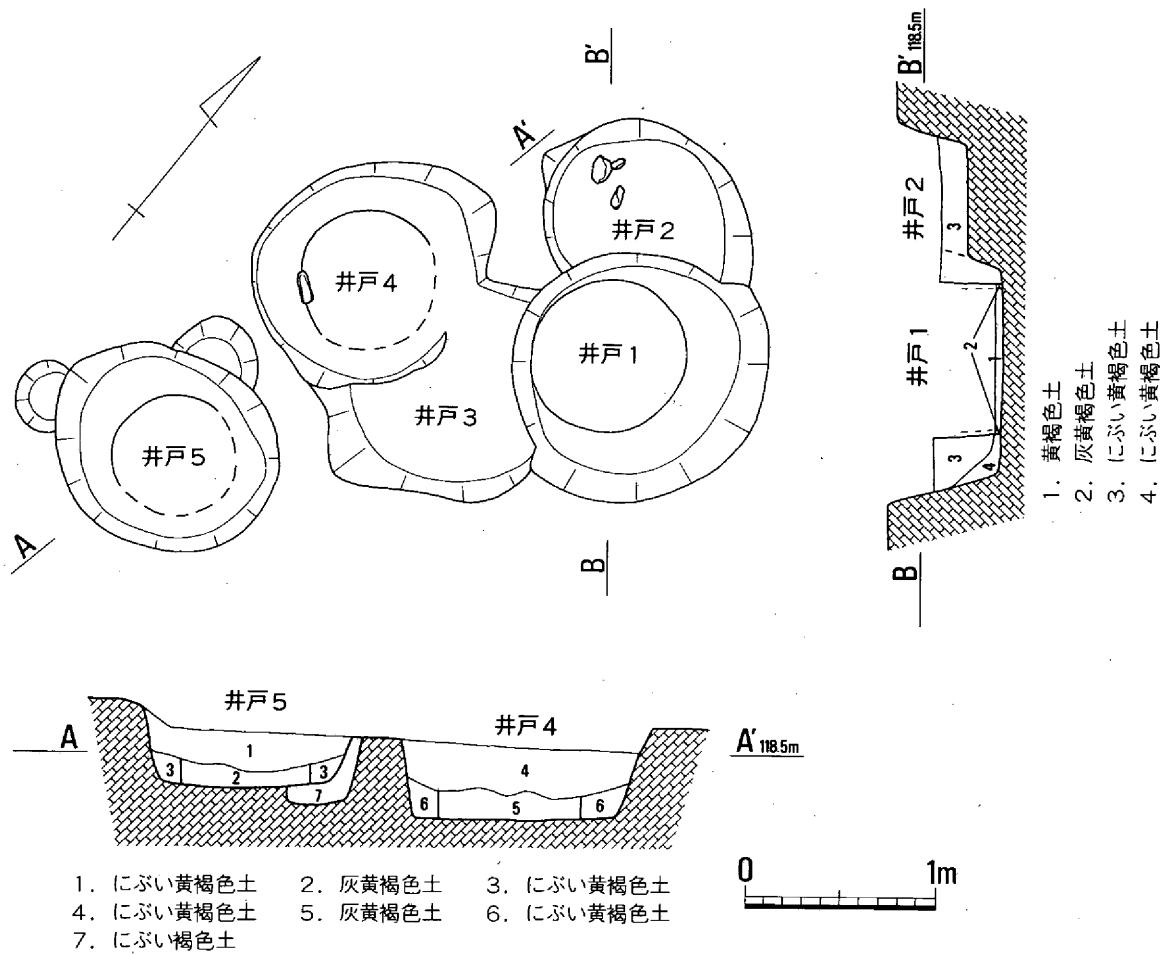
考えられ、他の近世遺構との関係からも17世紀代としてよいであろう。

出土遺物としては、井戸1からは近世の遺物に混じって中世の遺物も出土しているが、ここでは井戸の時期を決定するものののみを図示した（第33図—127・128）。127は17世紀前半の備前焼小皿で1層中の底部直上で出土した。口径112mm、器高18mm、厚さ2.5mmを測り、内面色調は暗赤褐色で、底部外面は回転糸切り後ヘラ調整を施している。口縁端部にわずかに煤の付着が認められたことから灯明皿として使用していたと考えられる。128は17世紀後半の京焼系陶器塊の底部片で3層中より出土した。高台径約2.4cmを測り、比較的高い高台の端部以外全面に淡黄色の灰釉をかけている。

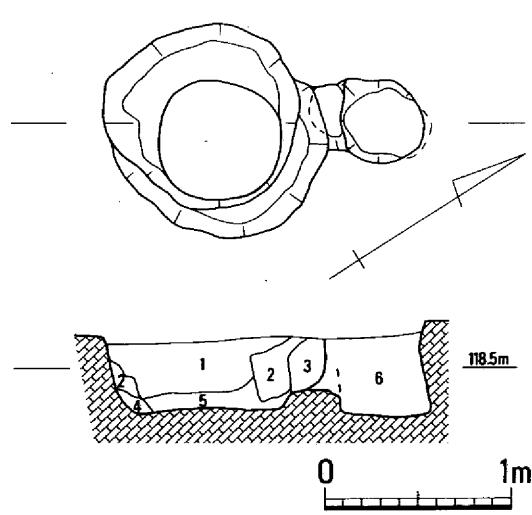
井戸6（第35図）建物2の南東に近接して検出した。径約1.2mの不整円形を呈し、内部東側に段を有す。土層観察から径64cmの円形の井筒痕



第33図 遺構に伴う近世の遺物（1/4）



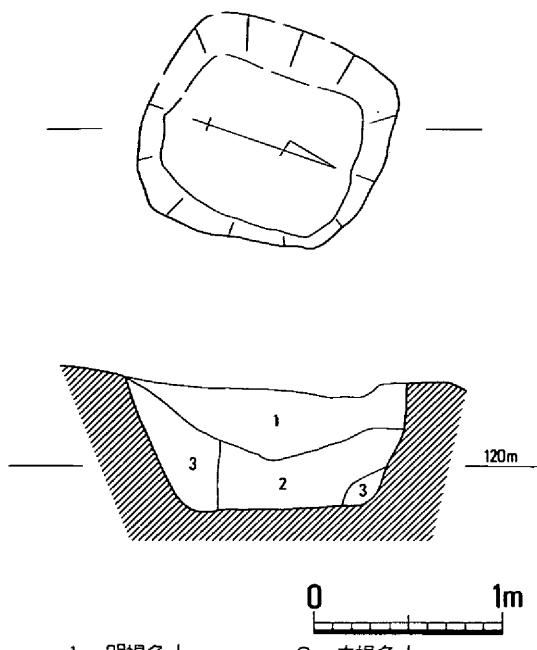
第34図 井戸 1～5 及び近接する柱穴 (1/40)



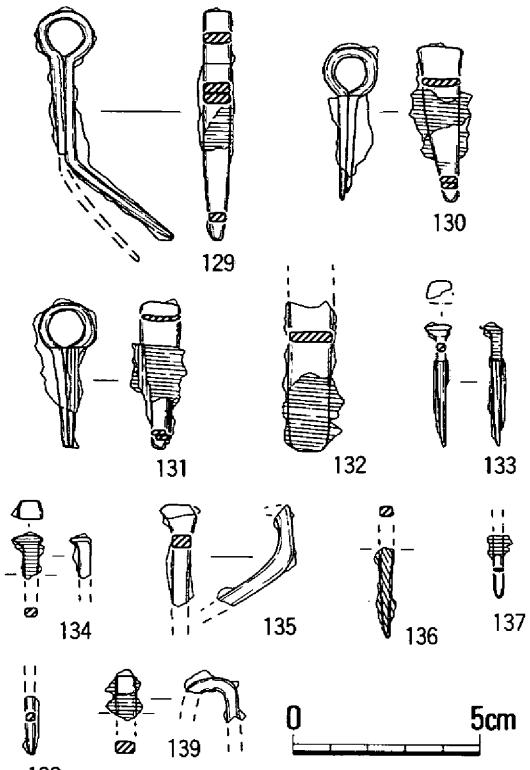
第35図 井戸 6 及び近接する柱穴 (1/40)

が確認でき、底部がグライ化していた。北側に近接してピット 2 基が確認されたが井戸との関係は不明である。時期は、埋土中より勝間田焼の塊・甕の小片が出土しており、中世以後と考えられるが、規模、構造が類似していることから井戸 1～5 と同時期の17世紀後半以後が考えられる。

**土壙墓 2 (第36図)** 1号墳のくびれ部盛土中央で検出した。一边約120cm、深さ65cmの方形を呈する。埋土は3層に分層され、遺物は特に2層と3層の境付近に多く見られた。遺物には、勝間田焼の塊小片や鉄製品(第37図・第9表)があり、鉄製品に木質痕が見られることと、埋土の堆積状況から木製の棺桶が埋設されていたと考えられる。時期は中世以後と考えられるが、この土壙が中世の遺物を含む古墳流土から掘り込まれてい



第36図 土壙墓2 (1/40)



第37図 土壙墓2出土遺物 (1/2)

ることから近世の可能性も

推定される。

**土壙3 (第38図) 4号**  
墳周堀の南側で検出した。  
径約170cm、現存深62cmの  
円形を呈し、底面は水平で  
埋土は単層で地山風化土の  
ブロックで人為的に埋めら  
れている。また、西に近接  
して径24cm、深さ約5cmの  
円形ピットを検出したが関  
連の有無は不明である。時  
期は、遺物として勝間田焼  
塼・甕の小片が出土していることから中世以後と考えられる。

**焼土壙 (第39図)** 2号墳西斜面で検出した。長径48cm、短径32cm、現存深約6cmの長楕円形を呈  
している。埋土は2層に分層されるが、両層とも2×5cm程の比較的大きな木炭を含み、上層には焼  
土も見られたが、底面に明瞭な受熱痕は認められなかった。埋土をすべてふるいにかけたが、鉄滓等  
は認められず、時期は、遺物に勝間田焼塼胴部の小片が出土していることから中世以後と考えられ  
る。また、土壙周辺を精査したが柱穴は存在していなかった。

**遺構に伴わない遺物 (第40図)** 表土と耕作土中から多量に出土しているが、碎片化しているため  
ここでは時期を比定できる遺物のみを図示した。

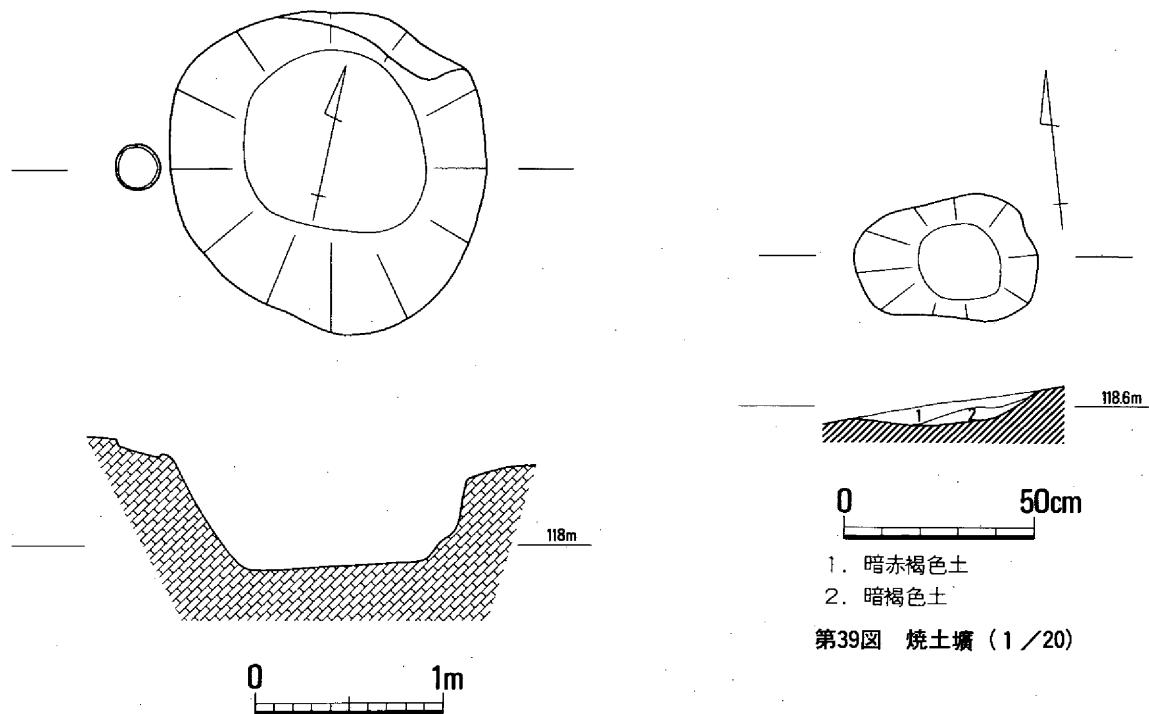
図番号	器種	全長 (現存長)	断面幅	頭部最大幅 (推定幅)	木目方向	板の長さ	備考
133	釘	33	2.0×2.0	(7.0)	タテ・ヨコ	8.0	木目は上半ヨコ、下半タテ方向
134		(12)	3.5×3.0	7.0	ヨコ	—	頭部台形
135		(33)	5.0×3.5	—	—	—	上半で屈曲
136		24	4.0×2.5	—	ナナメ	—	
137		(16)	2.5×1.0	—	ヨコ	—	
138		(16)	2.5×2.0	—	—	—	

(単位はmm)

図番号	器種	器形	全長 (現存長)	断面幅	木目方向	備考
129	銛金具	75.5	2.5×7	ヨコ	輪内径9.5、断面幅は脚部で計測、棺金具?	
130	鐵	銛金具	41	1.5×4.5	ヨコ	輪内径9、断面幅は脚部で計測、棺金具?
131	金	銛金具	38.5	1.5×3.5	ヨコ	輪内径9.5、断面幅は脚部で計測、棺金具?
132	具	不 明	(39.5)	3×6	ヨコ	棺金具?
139	不 明	12	3×5	ヨコ	棺金具?、小型の銛?	

(単位はmm)

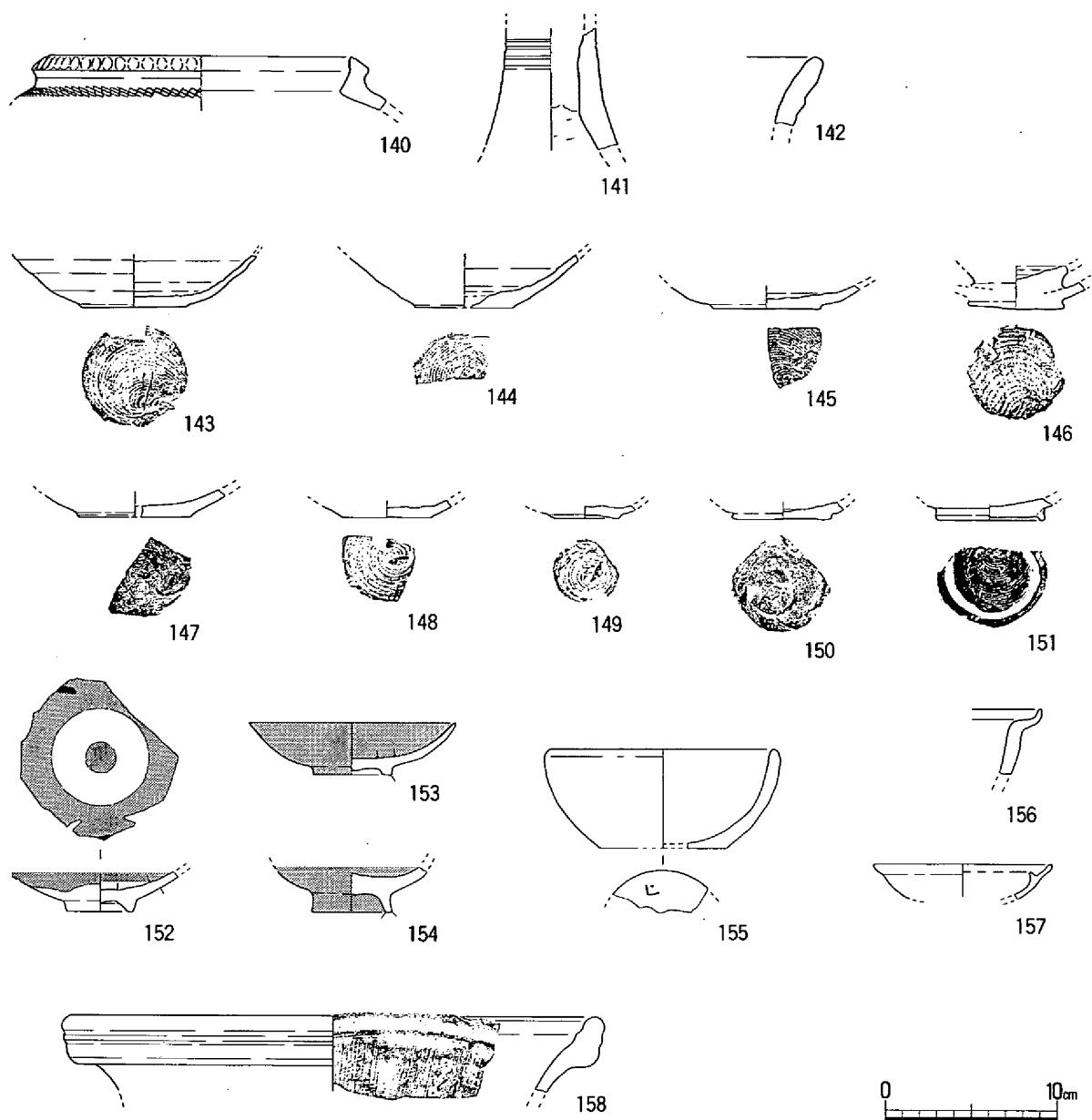
第9表 土壙墓2出土遺物観察表



第38図 土壙3及び近接する柱穴（1／40）

第39図 燃土壙（1／20）

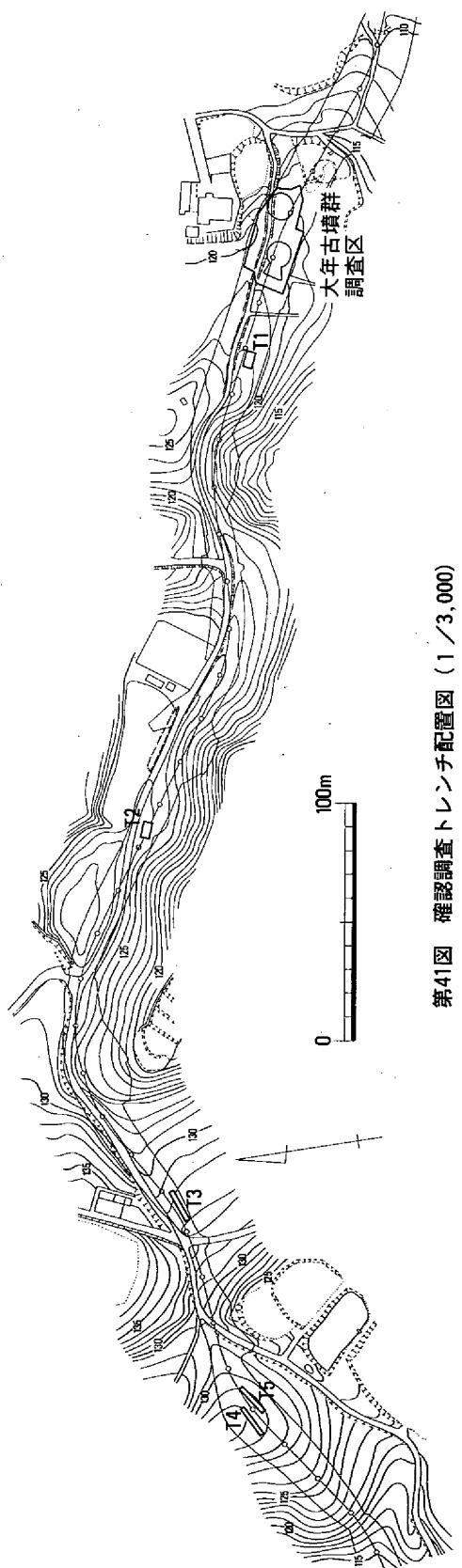
141・142は弥生時代中期末から後期初頭の壺の口縁部と高坏脚部で風化が著しい。141は表面がにぶい黄橙色を呈し砂粒をわずかに含む。口縁部には竹管状工具による円形刺突文、頸部にはヘラ状工具による斜格子文を施す。142は表面がにぶい橙色を呈し砂粒を多く含む。外面は最低4本の平行沈線を施し、内面上半にはしぶり痕、下半には粗い横方向のナデが見られる。143は12世紀の勝間田焼甕口縁で、外面は強いナデによる稜線が見られ、端部はやや尖り気味に丸く仕上げる。144～149・151・152は12世紀の須恵質の勝間田焼塊底部で底径は約5.0～8.4cmですべて糸切り底をもつ。器形は底部と胴部の境が明瞭なもの（146・147・151・152）と、やや不明瞭なもの（144・145・148・149）が見られる。147は2個体が焼成時に張り付いている。152は糸切り後に高さ約7mmの高台をやや外方に踏ん張るように張り付けている。150は12世紀の須恵質の勝間田焼小皿底部で底径3.8cmを測り、底部はややくぼんだ平底で糸切り痕が見られる。153～155は17世紀末から18世紀初頭の肥前系陶器で、153は高台径約3.8cmの皿で内外に白色釉がかかり、内面には染付けが施され見込みには蛇ノ目釉剥ぎが見られる。154は口径12cm、高さ3cm、高台径4.5cmの皿で内外に緑釉がかかり見込みには蛇ノ目釉剥ぎが見られる。また、高台端部と見込みに目砂痕が残っている。155は高台径4.3cm、高台高約1cmの塊で内外全面に灰釉がかかり、高台端部に目砂痕が見られる。156は16世紀末の備前焼鉢で、やや歪みが見られるが、口径約13cm、高さ5.8cm、底径7.4cmを測るボール形を呈す。内外とも暗紫色を呈しており、緋襷が見られる。また底部は平底で「ヒ」の文字が線書きされている。157は13世紀頃の土師質土器の鍋口縁部で頸部から口縁部の屈曲が著しく、口縁端部は内傾する面をもつ。158は17世紀後半の備前焼灯明皿で、受部の開口部の有無は小片のため不明だが、口径10.2cm、受部径7.8cmを測り、内外とも暗紫色を呈している。159は17世紀後半の備前焼摺鉢で口径約33.4cmを測る。内面の摺り目は9本1単位で金属製と思われる櫛状工具でつけられている。口縁部外面には2条の凹線がめぐり、黄胡麻が見られる。体部は赤褐色を呈している。



第40図 遺構に伴わない遺物（1／4）

図示した遺物以外では、中世の勝間田焼の甕・鉢の胴部片で、外面に格子目のタタキ痕、内面にナデ痕の見られる破片が多く見られた。また、江戸時代の肥前系磁器の染付けも数点出土している。

## 第4章 確認調査の概要



確認調査のトレンチ設定は、路線内を踏査した上で、周知の遺跡に近接し地形的に遺跡の存在する可能性が推定される平坦地に設定した（第41図）。

調査は重機により遺構・遺物の確認をしながら徐々に掘り下げを実施した。

T 1（第42図）は、大年古墳群の西に近接する地点に  $4 \times 7$  mで設定した。腐葉土直下にやや粘性のある流土層が約15cm程堆積し、その下は地山層である。

遺物・遺構はまったく認められなかった。

T 2（第42図）は、鍛冶屋塗1・2号墳の東に近接する地点に  $4 \times 7$  mで設定した。腐葉土直下にやや粘性のある流土層が約25cm程堆積し、その下は地山層である。

遺物・遺構はまったく認められなかった。

T 3（第42図）は、鍛冶屋塗古墳に北接した平坦地に  $2 \times 14$  mで設定した。近年圃場整備が実施され、その際標高の高いところを削平し、谷を埋め広い平坦地を築いている。そのためトレンチ内の高い地点では腐葉土直下ですぐに地山層が確認された。それに対して低い地点では腐葉土下に厚いところで約80cmの地山土等の造成土があり、その下に6層の流土が堆積している。そのうち第6層は粘質土で炭が微量含まれているが遺物は全く見られなかった。

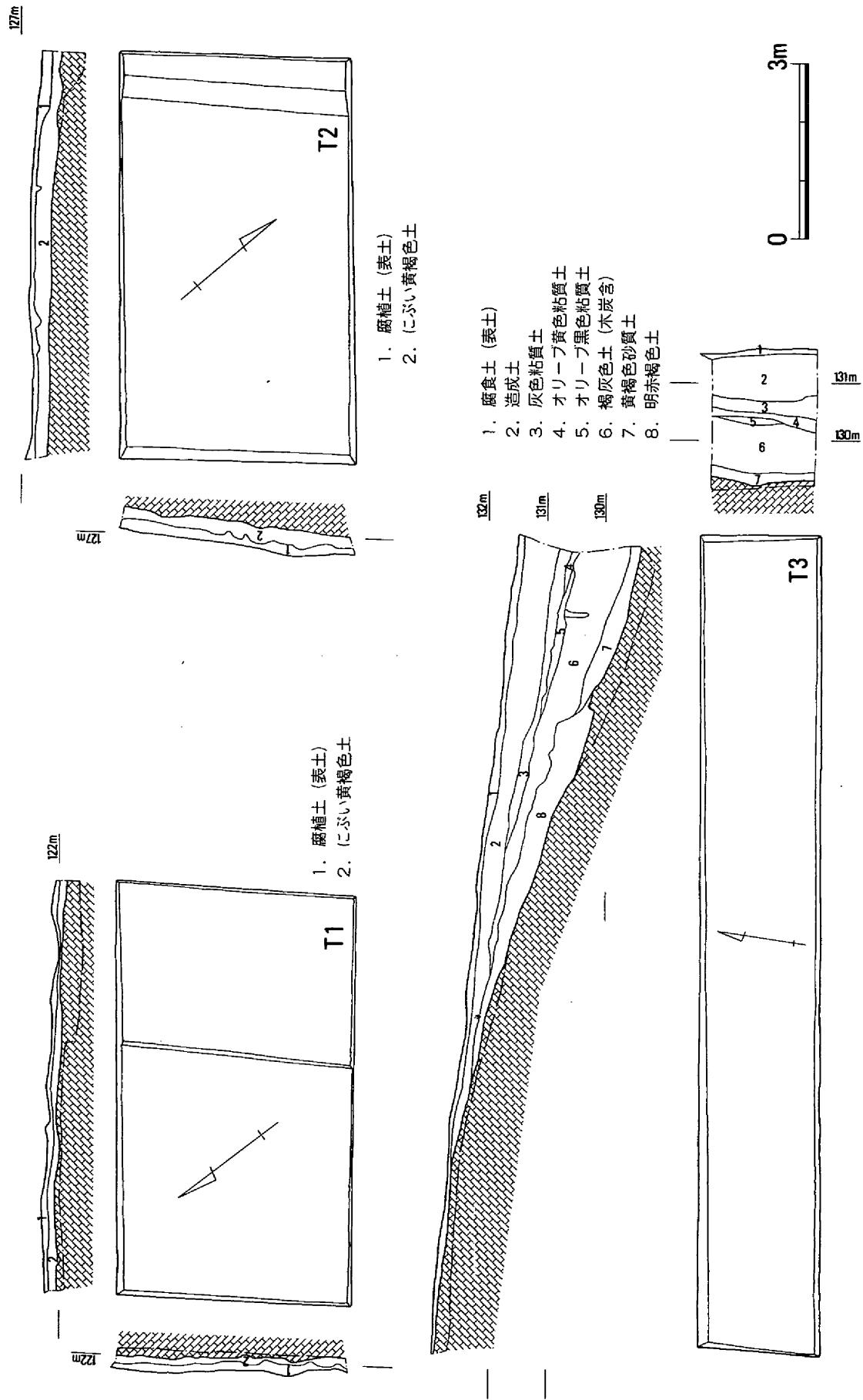
トレンチ全体でも遺物・遺構は全く認められなかった。

T 4（第43図）は、上相遺跡の谷をはさんで北の尾根上平坦地に尾根に直交させて  $2 \times 14$  mで設定した。腐葉土直下に流土層が10cm以上堆積し、その下は地山層である。

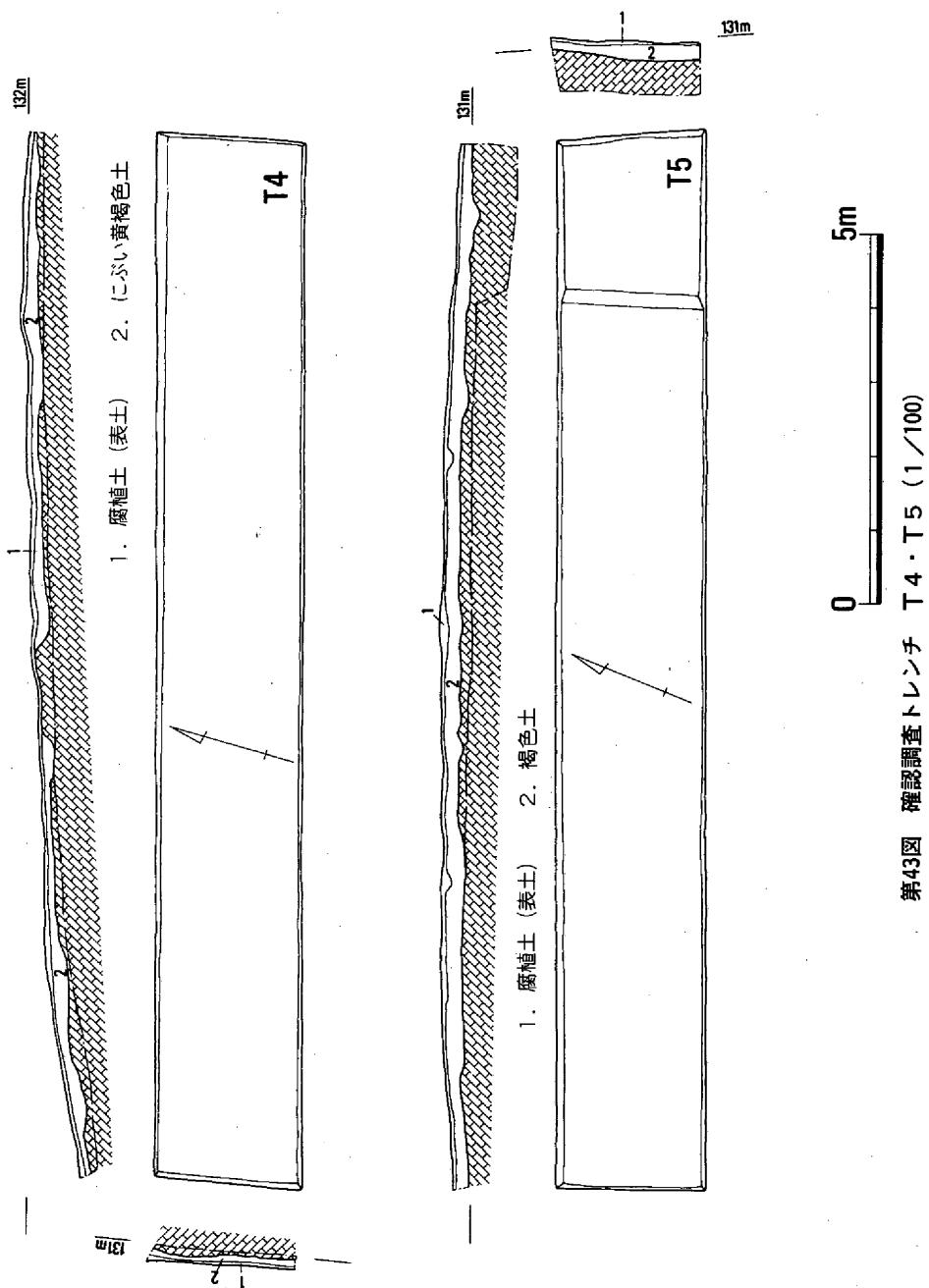
遺物・遺構はまったく認められなかった。

T 5（第43図）は、T 4の南に平行させて  $2 \times 14$  mで設定した。腐葉土直下に流土層が約20cm程堆積し、その下は地山層である。

遺物・遺構はまったく認められなかった。



第42図 確認調査トレーンチ T1~T3 (1/100)



第43図 確認調査トレンチ T4・T5 (1/100)

## 第5章 まとめ

今回、後期古墳4基からなる大年古墳群のうち、1・2・4号墳の調査を行なった。1号墳は復元全長約18.5mの前方後円墳、2号墳は復元径約12mの円墳、4号墳は墳形・規模とも不明の小規模古墳である。内部主体は2号墳のみで確認され、木棺直葬であった。1号墳では須恵器の装飾付壺や周堀内出土の多量の鉄滓・炉壁など、注目すべき遺物が出土している。また、調査区内において、近世を中心とする、古墳に伴わない遺構と遺物も発見されている。

ここでは大年古墳群について、その諸特徴と問題点を整理し、まとめとしたい。

### 1 大年古墳群の築造時期

築造時期の推定については、わずかながら各古墳から出土している須恵器が最も有効な手段となる。以下、須恵器の型式名については、陶邑古窯址群における田辺編年<sup>(1)</sup>を使用する。

まず1号墳についてであるが、築造時期を知るには、後円部中央攢乱壙を中心として出土している蓋坏、高坏などの小形器種が参考になる。坏蓋（第11図—7～12）は、口縁端部に内傾する面をもつものと、端部内面に沈線をもつもの、端部を丸くおさめるものがあり、肩部には明確な段をもつものもあるが、もたないものが多い。坏身（第11図—13～15）は、口縁立ち上がり端部をいずれも丸くおさめ、立ち上がりの高さは比較的高い。蓋、身ともにすべて破片であり、正確な口径復元はできない。高坏（第11図—17・18）は、いずれも脚部に1段の透かしをもつ。このような特徴をもつ須恵器は、TK10型式の新しい段階に並行するものと考えられる。実年代でいえば、およそ6世紀第3四半期の頃と捉えられ、この時期に1号墳は築造された可能性が高い。

次に2号墳であるが、まず主体部の中から出土している須恵器の年代について考えておく。主体部内からは、坏蓋・坏身のセット、ミニチュアの提瓶が出土しているが（第19図）、ここでは坏蓋、坏身から年代を考えてみたい。坏蓋は、口縁端部を丸くおさめ、肩部にはやや不明瞭な段ないし沈線を有する。器高が非常に高い。坏身は、口縁部立ち上がりが内傾し高さもあまり高くない点で1号墳のものよりはやや新しい様相を示している。ただし蓋・身ともに、ヘラケズリが、粗いながらもかなり広範囲に施されており、この点では古い特徴をもっているといえる。個体数が限られているので判断の難しい部分はあるが、一応TK43型式の古い段階に併行するものと考えられる。実年代でいえば、1号墳よりやや遅れる6世紀後半であろう。次に2号墳の主体部外から出土している須恵器についてであるが（第22図）、坏蓋は口縁端部内面に面ないし段をもつものがあり、高坏は1段透かしのものである。これらの須恵器は、1号墳出土のものとほぼ共通する特徴をもっており、主体部内出土のものよりは若干古い様相を示している。今回検出された主体部は、墳丘の中心からやや南に偏った位置にあり、盗掘壙部分にもう1基の主体部が存在していた可能性が高いが、これらの古い様相をもつ須恵器はその主体部に伴う可能性も考えられる。しかしながら、主体部外から出土している須恵器は、出土状況から確実に2号墳に伴うものかどうか疑わしく、慎重になる必要がある。いずれにしても、2号墳は1号墳に後続する時期に築造されたと考えてよいと思われる。

4号墳はごくわずかな遺物しか出土していないが、時期を推定することのできるものがある（第26図）。須恵器の長頸壺（118）は1条の沈線をもつ長細い頸部で、丸みをもって胴部につながるようであり、7世紀中葉頃の型式である。高坏（119）は、口径が小さく坏部下面に向かって屈曲する部分に

明瞭な稜線をもたないことから、これも7世紀中葉ないし後半のものと考えられる。甕(120)は小片であるが、粗い格子目のタタキが施されており、新しい時期の様相を示している。これらの須恵器から、4号墳は7世紀中葉頃に築造されたものと考えておきたい。また、その年代観から、1号墳と4号墳の間の古道周辺で出土している陶棺片(第27図)も4号墳に伴うものと考えられる。土師質亀甲形陶棺の蓋の突起が出土しているが(121)、穿孔して差し込む方法で取り付けられており、突起の形態は突出度の低い円筒形である。これも7世紀中葉の年代が与えられる。また須恵質の切妻家形陶棺の破片も出土しており、やはり7世紀でも新しい時期の様相を示している。

以上をまとめると、まず6世紀第3四半期頃に1号墳が築かれ、それに後続して大差ない時期に2号墳、そしてやや時期をおいて7世紀中葉頃に4号墳が築かれている。未調査の3号墳は、第3章の冒頭でふれた鉄釘の表採資料から6世紀後半に位置付けられ、鉄釘を使用しない木棺を伴う2号墳より新しいから、1・2号墳と4号墳との間にに入る時期に築造されたものと思われる。

## 2 1号墳の墳形と特徴

1号墳は今回の調査で小規模な前方後円墳であることが判明した。復元全長約18.5mという、岡山県下でも最小規模に属するものであるが、前方後円墳の築かれた数のあまり多くない古墳時代後期の資料として重要である。本古墳の墳形の特徴は、後円部径に比して前方部が短く、前方部前端に向かって大きく開く形態をなしている点である。後円部径と前方部長の比率はほぼ2:1である。前方後円墳で時期や墳形を正確におさえることのできるものは多くないが、発掘調査を経ており、このような大年1号墳の墳形に類似した例として、津山市茶山1号墳<sup>(2)</sup>がある。本古墳も推定全長20.6mという小規模な前方後円墳で、後円部径と前方部長の比率もほぼ2:1で大年1号墳と共通する。さらに、前方部前端の片側のコーナーにおいて、周堀が途切れ陸橋状に掘り残されている点も共通している。時期は大年1号墳よりも古い5世紀末葉ごろの築造で、堅穴式石室を内部主体にもつている。

大年1号墳と同じく美作町に所在する緑青塚古墳<sup>(3)</sup>は、後円部中央の堅穴式石室付近からTK10型式に相当する須恵器环身が出土しており、大年1号墳と近い6世紀中葉ごろの築造であると考えられる。全長約36mで、大年1号墳よりはやや大きな規模であるが、後円部径と前方部長の比率はほぼ2:1で、前方部が短いという墳形の特徴は共通している。また、同じく美作町の金焼山古墳<sup>(4)</sup>も、出土遺物から古墳時代後期の築造と思われるが、全長約36mで堅穴式石室を内部主体にもち、後円部径と前方部長の比率はやはりほぼ2:1である。

このように、大年1号墳の所在する美作町をはじめ、美作地域に、後円部径に比して前方部の短い小規模前方後円墳が目立って築造されているように思われる。これと関連して、帆立貝式と呼ばれる前方部の非常に短い前方後円墳も、同様に6世紀代に築造されている。津山市中宮1号墳<sup>(5)</sup>が著名であり、大年1号墳と近い年代のもので、全長約23mを測る。

以上のような後円部径に比して前方部長の短い小形の前方後円墳は、古墳時代中期には帆立貝形のものなど、普遍的に見られるものであるが、後期になると、岡山県南部などではあまり見られなくなるようである。それに対して美作地方では6世紀代の例が比較的多く、当該地方の地域的特色である可能性があり、そのような点で大年1号墳は在地的な墳形をとっているようである。

規模についてみると、小規模なものが多く、中でも大年1号墳は最小規模である。墳丘の土量、すなわち築造に要する労働力も、大規模な円墳とかわらない程度のものであろう。しかしながら、前方

後円墳という墳形をとっているという点で通常の大形円墳とは区別しなければならない。墳丘の盛土の仕方についても、1号墳はかなり丁寧な互層をなしており、2号墳の盛土とは大きく異なっている。このような古墳を築いた背景にはやはり特別な経済基盤を考えなければならない。

### 3 大年古墳群の内部主体について

調査した1・2・4号墳のうち内部主体が確認できたのは2号墳のみである。木棺直葬であり、おそらく1号墳も同じであると推定される。6世紀の古墳の内部主体は、大まかにいえば竪穴式石室あるいは木棺直葬から、横穴式石室へという変化が見られるが、その時期は、岡山県内の場合、ほぼ6世紀中葉ごろに始まるものとして捉えられる。美作地方における導入期の横穴式石室は、津山市中宮1号墳に見られるが、ほぼTK10型式に相当する須恵器を伴っている。すなわち、大年1・2号墳とほぼ同時期かやや古い年代のものであり、大年1・2号墳はこの地方に横穴式石室が導入され始めた時期に相次いで築造されたということができる。しかしながら、大年2号墳には横穴式石室は見られず、木棺直葬の主体部を伴っており、1号墳についても同様であると思われる。2号墳の築造された後の段階、須恵器でいえばTK43型式併行期になると、当地方でも横穴式石室が普及していくから、2号墳の主体部は、横穴式石室に転換する直前の、ほぼ最後の段階の木棺直葬であることができる。2号墳と同じような時期の木棺直葬墳は、大年古墳群の西方1km弱の位置に所在する勝田郡勝央町の小中古墳群<sup>(6)</sup>において見られる。美作地方の中でも当地域は横穴式石室の導入がやや遅れ、遅くまで木棺直葬墳が残っていたといえるかもしれない。大年3・4号墳の主体部は不明であるが、この段階には当地域でも横穴式石室が導入されているものと考えられる。

### 4 1号墳周堀内出土遺物の年代と性格

1号墳からは、上で述べた築造時期を示すと思われる後円部中央攬乱壙出土の土器のほかに、前方部からくびれ部にかけての周堀内から、多数の遺物が出土している。須恵器と鉄滓・炉壁がほとんどであり、それらの大部分は周堀底面から20cm前後浮いた、ほぼ同様のレベルで出土している。特に注目されるのは、60点をこえる多量の鉄滓・炉壁であり、これらが須恵器と一緒に出土している状況である。そこでまず須恵器を検討することによって、周堀内出土遺物の年代を検討しておきたい。

確実に周堀内にパックされた状態で出土している須恵器には、甕1個体と、蓋1個体がある。いずれも時期を決定しにくい器種であるが、類例を検討することによって時期の推定を行なってみたい。甕(第12図-31)は、いくらかの特徴的な点をもっている。それは、①口縁部が内湾気味に開き、そのままほぼ水平の面をもって終わるという特徴的な形態、②口縁部外面の、凹線と櫛描波状文を交互にめぐらせる文様構成、③胴部内面の車輪文当て具痕である。①②の特徴を兼ね備える口縁部をもつ甕の例は、岡山県内では津山市柳谷窯址<sup>(7)</sup>、浅口郡金光町上竹西の坊窯址<sup>(8)</sup>などに見られるが、伴う壺・高壺類から判断して、いずれも7世紀代のものである。一方、③の車輪文の当て具痕については、県内でも、笠岡市鍛冶屋遺跡<sup>(9)</sup>の甕、岡山市前池内3号墳<sup>(10)</sup>の横瓶、岡山市百間川原尾島遺跡<sup>(11)</sup>の横瓶、津山市小原遺跡<sup>(12)</sup>B地区土壙墓3の甕など例が多いが、7世紀前半から中葉の資料が多いようである。このようなことから、1号墳周堀内出土の甕は、7世紀代の年代が与えられよう。次に蓋(第13図)について検討する。これは非常に珍しい器種であり、県内でよく似たものは、浅口郡金光町上竹西の坊窯址の資料ぐらいである。同じ灰原から出土している壺・高壺類の年代は、7世紀中葉から8世紀代までの幅がある。さらに同じ灰原から、先に述べた1号墳のものに類似する甕が出土しているのは注目される。以上のような類例の存在から、1号墳周堀内出土の須恵器及びそれに

伴う鉄滓・炉壁の年代は、7世紀、それもあり古い段階ではなく、中葉前後であると推定することができよう。

周堀内遺物の年代を7世紀代と考えると、1号墳の築造年代との間に、かなりのギャップが生じる。第3章でも述べたように、この甕の出土状況はやや不自然であり、人為的な破壊を伴う祭祀行為の可能性があるが、それは、古墳築造後かなりの時間が経ったのちに行なわれたものということになる。この祭祀行為には多量の鉄滓・炉壁が伴っていることから、それは製鉄に関連するものであった可能性が高い。周堀内から出土した鉄滓・炉壁は、計63点、総重量7.17kgに達するもので、肉眼観察しか行なっていないが、基本的に製鍊滓であると考えられる。日本列島における製鉄の開始時期については諸説あるが、現在発見されている製鉄遺跡はいずれも6世紀後半以降のものである。その最も古い時期のものとされている岡山県総社市千引かなくろ谷遺跡<sup>(13)</sup>では、TK10型式からTK43型式にかけての須恵器が伴っている。また古墳に供献された鉄滓においても、ちょうどこの時期から製鍊滓が一般的になる傾向があるようである<sup>(14)</sup>。大年1号墳はまさにそのような時期に築造された古墳であり、周堀内出土の多量の鉄滓・炉壁が7世紀代に降るものであるとしても、やはりその被葬者と製鉄との関係を断ち切って考えることはできない。前方後円墳という墳形をとることができた背景には製鉄技術の存在が考えられるのである。さらに1号墳の築造時期をも考えあわせると、この地で製鉄を開始した集団による造墓であった可能性も考えられる。そして7世紀代に多量の鉄滓・炉壁が供獻されているように、この地での製鉄は、7世紀代、そしてさらに後まで継続されたと思われる。

## 註

- (1) 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園研究論集第10号 1966年
- (2) 保田義治『茶山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集 1989年
- (3) 松本和男「緑青塚古墳の出土遺物について」『岡山県埋蔵文化財報告』5 1975年
- (4) 今井亮「原始・古代社会」『美作町史編纂中間報告書』 1964年
- (5) 近藤義郎「中宮第1号墳発掘調査報告」同編『佐良山古墳群の研究』第1冊 1952年
- (6) 高畠知功・栗野克己ほか「小中古墳群・小中遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』4 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7 1975年
- (7) 行田裕美「柳谷窯址発掘調査概要」『年報・津山弥生の里』第1号 1994年
- (8) 井上弘・武田恭彰「上竹西の坊遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』3 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69 1988年
- (9) 岡田博ほか「鍛冶屋遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』4 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告70 1988年
- (10) 中野雅美ほか「前池内遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』8 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89 1994年
- (11) 正岡睦夫ほか「百間川原尾島遺跡」2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56 1984年
- (12) 行田裕美・小郷利幸・木村祐子『小原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集 1991年
- (13) 武田恭彰「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概要」『総社市埋蔵文化財調査年報』1 1991年
- (14) 安川豈史「古墳時代における美作の特質——群小墳の動向と評価——」近藤義郎編『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社 1992年



1. 大年古墳群遠景  
(中央の家並部分)



2. 大年古墳群  
調査前の状況



3. 1号墳全景  
(北西より)

図版2



1. 1号墳盛土状況  
(南東より)



2. 1号墳周堀内  
須恵器壺集中部



3. 2号墳全景  
(南東より)

図版3



1. 2号墳主体部と遺物出土状況（南より）



2. 2号墳主体部刀子・玉類出土状況

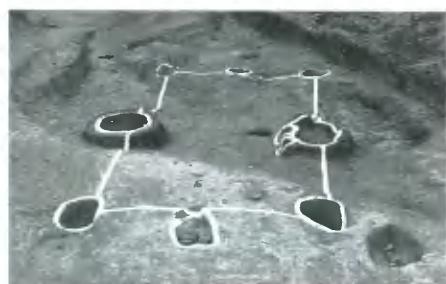


3. 2号墳主体部鉄鎌出土状況



4. 4号墳周堀検出状況（南より）

図版4





1. 土壌3



2. 焼土壤



3. 1号墳出土遺物 1

図版6



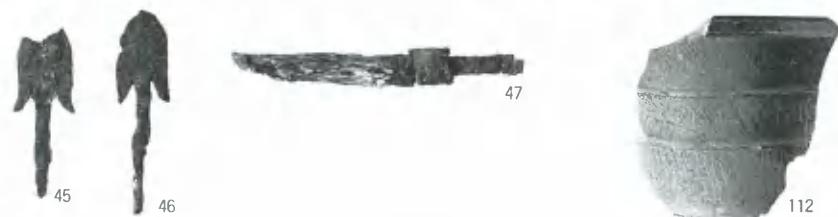
1. 1号墳出土遺物 2



2. 2号墳出土遺物 1



38



1. 2号墳出土遺物 2



2. 4号墳出土遺物

3. 古道周辺出土陶棺片

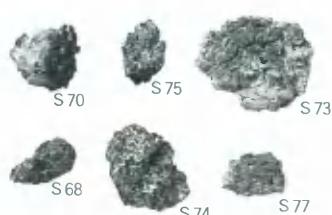
図版8



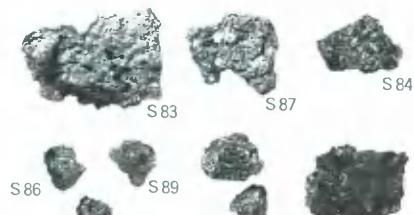
1. 1号墳出土炉壁



2. 1号墳出土鉄滓



3. 2号墳出土鉄滓・炉壁



4. 4号墳出土鉄滓・炉壁



125



127



129

130



126

5. 近世の遺構に伴う遺物



131



132



133



134

135

136

137



138

6. 土壙墓2出土遺物



140



141



155



146



151



152

154

7. 遺構に伴わない遺物

## 報告書抄録

ふりがな	おおとしこふんぐんほか							
書名	大年古墳群ほか							
副書名	農道美勝線建設に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	102							
編著者名	正岡睦夫・尾上元規・杉山一雄							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-01 岡山県岡山市西花尻1325-3				TEL 086-293-3211			
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700 岡山県岡山市内山下2-4-6				TEL 086-224-2111			
発行年月日	西暦 1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°, ′, ″	°, ′, ″			
おかやまけんあいだぐん 岡山県英田郡 みささかちょうかみや 美作町上相 1487-1ほか	おかとしこふんぐん 大年古墳群	644		35度 01分 52秒	134度 08分 49秒	19940411～ 19940714	860	農道美勝線 建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大年古墳群	古墳生活址	古墳近世	古墳 堀立柱建物 柱穴 井戸 土壙 墓	3基 2棟 多数 6基 3基 2基	弥生土器・須恵器・ 中近世陶磁器・鉄滓・ 埴輪・陶棺・鉄器・ 玉類	6世紀の小形前方後円墳		

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 102

大年古墳群ほか

平成7年3月20日 印刷

平成7年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備  
文化財センター

発行 岡山県教育委員会

印刷 西日本法規出版株式会社